

住宅型有料老人ホームリトモ高松新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

空港跡地遺跡

2011年3月

医療法人 慶昭会
高松市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、住宅型有料老人ホームリトモ高松新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、空港跡地遺跡にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本報告書の執筆・編集は、渡邊誠が行い、鉄器については高上拓が担当した。
- 3 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである(五十音順、敬称略)。
西松建設株式会社四国支店、香川県立ミュージアム、大久保敏也、小野秀幸、
片桐孝浩、古野徳久、高木敬子、乗松真也、信里芳紀
- 4 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を示す。
- 5 出土遺物の実測図は、土器は1／3, 1／4, 石器および金属器は1／2, 1／3, 1／4, 遺構の縮尺については図面ごとに示している。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過.....	1	第Ⅳ章 まとめ.....	39
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境.....	2	遺物法量一覧表.....	40
第Ⅲ章 調査の成果.....	7		

挿 図 目 次

第1図 調査の状況	1	第21図 SH 7・8出土遺物	27
第2図 高松市および市域における位置図	2	第22図 SH 8出土遺物	28
第3図 空港跡地遺跡周辺遺跡分布図	6	第23図 SX 1 平・断面図	30
第4図 遺構配置図	7	第24図 SX 1 平面図	31
第5図 土層断面図	8	第25図 SX 1 出土遺物①	32
第6図 SH 1 土器出土状況	10	第26図 SX 1 出土遺物②	33
第7図 SH 1 平・断面図	11	第27図 土坑平・断面図	34
第8図 SH 1 出土遺物①	12	第28図 土坑出土遺物	34
第9図 SH 1 出土遺物②	13	第29図 SE 1 平・断面図	35
第10図 SH 1 出土遺物③	14	第30図 SE 1 出土遺物	35
第11図 SH 2 平・断面図	15	第31図 SP 平・断面図	36
第12図 SH 2 出土遺物	16	第32図 SP 出土遺物	36
第13図 SH 3・4 平・断面図	17	第33図 その他の出土遺物	38
第14図 SH 3・4 出土遺物	18		
第15図 SH 5 平・断面図	20		
第16図 SH 5 出土遺物	21		
第17図 SH 6 平・断面図	22		
第18図 SH 6 出土遺物	23		
第19図 SH 7 平・断面図	24		
第20図 SH 7 平・断面図	25		

挿 表 目 次

第1表 空港跡地周辺の遺跡	5	第2表 遺物法量一覧表	40
---------------------	---	-------------------	----

写 真 図 版 目 次

図版 1- 1	SX 1 上層検出状況	図版 10- 1	SH 7・8 完掘状況
図版 1- 2	SH 1 土器出土状況	図版 10- 2	SH 8 中央土坑①土層
図版 2	SX 1 出土土器	図版 10- 3	SH 8 中央土坑②土層
図版 3	SH 1 出土遺物	図版 10- 4	SH 8 中央土坑完掘状況
図版 4- 1	SH 1 出土土器	図版 10- 5	SH 5 土器出土状況
図版 4- 2	その他の遺構出土土器	図版 11- 1	SX 1 検出状況
図版 5- 1	調査区全景①	図版 11- 2	SX 1 土器出土検出状況
図版 5- 2	調査区全景②	図版 11- 3	SX 1 土器撤去後状況
図版 5- 3	調査区全景③	図版 12- 1	SX 1 土器検出状況
図版 6- 1	調査区全景④	図版 12- 2	SX 1 下層石材検出状況
図版 6- 2	調査区全景⑤	図版 12- 3	SX 1 下層石材撤去状況
図版 7- 1	SH 1 完掘状況	図版 12- 4	SX 1 堀り方検出状況
図版 7- 2	SH 1 土器出土状況	図版 12- 5	SE 1 完掘状況
図版 7- 3	SH 1 土器出土状況	図版 12- 6	SE 1 土層
図版 7- 4	SH 1 土器出土状況	図版 12- 7	SK14 完掘状況
図版 7- 5	SH 1 土器出土状況	図版 12- 8	SK14 土層
図版 8- 1	SH 1-SP 1 土層	図版 13	SH 1 出土須恵器
図版 8- 2	SH 1-SP 1 完掘	図版 14	SH 1 出土土師器
図版 8- 3	SH 1-SP 2 土層	図版 15	SX 1 出土土器
図版 8- 4	SH 1-SP 2 完掘		
図版 8- 5	SH 1-SP 3 土層		
図版 8- 6	SH 1-SP 3 完掘		
図版 8- 7	SH 1-SP 4 土層		
図版 8- 8	SH 1-SP 4 完掘		
図版 9- 1	SH 2 完掘状況		
図版 9- 2	SH 3 完掘状況		
図版 9- 3	SH 4 完掘状況		
図版 9- 4	SH 5 完掘状況		

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

平成20年9月に有限会社三輝興産より上林町687・688番地の包蔵地照会があり、当該地が空港跡地遺跡に隣接することから任意の試掘調査などについての協議を行った。その後、同月25日に有限会社三輝興産より試掘調査の依頼が提出され、平成20年10月6～7日に試掘調査を実施した。その結果、開発対象地の南東側一角に方形の堅穴建物、柱穴、溝などが確認でき、古墳時代から中世にかけての集落跡の存在が明らかとなった。そのため、試掘調査結果を香川県教育委員会に報告した結果、遺構の認められた範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地と認定された。

その後、工事計画が固まった平成22年3月26日付けで工事主体である医療法人慶昭会から埋蔵文化財発掘の届出が提出され、香川県教育委員会から平成22年4月5日付けで工事によって影響を受ける包蔵地の範囲内において事前に発掘調査を実施するよう通知があった。

これを受け4月から5月にかけて発掘調査の実施に向けて高松市教育委員会と医療法人慶昭会で協議を行い、調査期間、調査費用について合意形成に至り、6月9日に協定書を取り交わし、(仮称)おおにし病院リトモ高松新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、埋蔵文化財の調査を開始することとなった。

当初、発掘調査は建物のコンクリート基礎および浄化槽によって影響を受ける包蔵地の範囲である185m²を対象としていたが、擁壁工事部分も追加し実施した。その後、当初予定していた範囲よりも西側に遺跡が延びることが明らかとなり、一部調査区を拡張して実施することとなった。

調査の結果、後述するように古墳時代の堅穴建物が8棟、平安時代の墓が1基、鎌倉時代の土坑、室町時代の井戸跡などの様々な時代の遺構の存在が明らかとなった。なお、調査面積・期間等については下記のとおりである。

対象面積 300 m²

調査主体 高松市教育委員会

調査原因 住宅型有料老人ホームリトモ高松

調査期間 平成22年6月9日～7月9日

第2節 整理作業の経過

整理作業については、調査終了後から実施し、出土遺物の洗浄・接合を実施し、分類作業および選別作業を行った後、遺構図面の整理および出土遺物の実測および拓本作業、製図を行い、最終的に執筆および編集作業を実施した。

なお、出土した金属製品については香川県立ミュージアムにてX線写真を撮影していただいた。



第1図 調査の状況

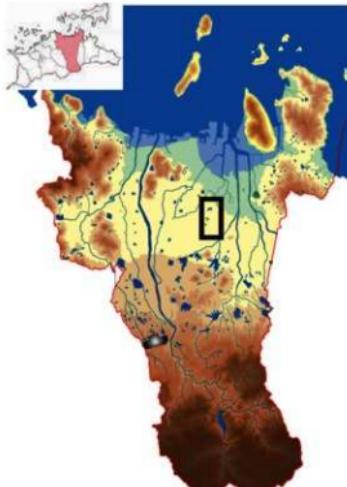
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

A. 地理的環境

高松市は香川県の県都で、県の中央やや東寄りに位置し、合併によってその市域は、讃岐山脈から瀬戸内海までに及ぶ。瀬戸内海に浮かぶ島嶼部も市域に含んでおり、備讃瀬戸を挟んで岡山県と向かいあっている。この合併によって讃岐平野を構成する高松平野の大部分が高松市の行政区域に含まれることとなり、地理的区分と行政区域がほぼ一致することとなった。その結果、現在では高松平野の歴史や各時代の文化を考えやすい状況が形成されている。

高松平野の南部には標高 600 ~ 1000m の讃岐山脈が聳え、前山丘陵地帯から瀬戸内海に向かって階段状に標高は低くなり、瀬戸内海沿岸部では標高 100 ~ 200m となる。平野部は花崗岩の風化した砂礫やマサなどの堆積によって形成されている。平野部には、残丘のように孤立した讃岐独特の景観を描き出している山塊群がいくつか存在している。この山塊群は、花崗岩丘陵の上に讃岐岩をはじめとする瀬戸内火成岩類が堆積して形成されており、平野の東部に屋島、立石山塊、南西部に石清尾山、淨願寺山、さらに西部に青峰、堂山の山系などが展開する。いずれも讃岐平野の特徴であるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、20 ~ 300m の低い山地である。これらの山塊に囲まれるような形で展開する高松平野を構成する地層は、領家花崗岩が基盤をなし、三豊層群、沖積層の順で層をなしている。平野部の大部分は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野で、沖積低地および扇状地性の低位段丘から構成されている。平野中部の栗林公園から平野東部の久米池を結ぶ標高 10m 前後を境に地形の傾斜が大きく変化しており、この境界線以北が沖積作用による三角州帯と考えられている。

高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が沖積平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現在の春日川以西が香東川による冲積作用によって形成されたものと考えられている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は 17 世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐し、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東



第2図 高松市および市域における位置図

北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、旧ガラ池を結ぶ流路等数本が知られる。その周囲には旧中州や後背湿地が展開していたことが明らかにされており、発掘調査でもその痕跡が数多く確認されている。なお、17 世紀の庵川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。調査地北西を流れていた旧河道は弥生時代中期前半以降にはその機能を失ったことが分かっている。

このような高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壤をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と洪積層の境目に多くのため池が分布する。これらのため池は、年間 1,000mm 前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また、ため池に加えて出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし、昭和 50 年の香川用水の通水によって、一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の

不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつあり、近年の開発に伴う農地の転用によるそれ自体の減少が、その傾向にさらに拍車をかけている。

B. 歴史的環境

高松平野では、ここ約20年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）などに伴う事前調査により、遺跡数が飛躍的に増大しつつある。特に、今回の調査地の上林町周辺においては、空港跡地開発事業を中心として、さらにその周辺で、香川県立高松桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴い周辺地域の開発が促進されており、発掘調査を随時行ってきた。最近では、さらに周辺での開発が促進され、空港跡地周辺では試掘確認調査を含め、ここ数年小規模ではあるが、調査が蓄積されつつある。その結果、埋蔵文化財の埋蔵状況のデータが蓄積され、面的に遺跡の広がりを捉えることが次第に可能となってきている。このような傾向は、今後も続くことが予想されており、調査地が増えることで、当時の状況をより鮮明によみがえらせることができるものと期待している。以下に高松平野における遺跡の変遷とそこから読み取られる集団の動態について概観しておく。

【旧石器～縄文時代】

旧石器時代の遺跡は、今回の調査地周辺では三谷町の横内東遺跡でナイフ形石器が出土しているほかは知られていない。高松平野では、中間西井坪遺跡、中間東井坪遺跡、中森遺跡、香西南西打遺跡、西打遺跡などで翼状剥片やナイフ形石器などの散布が確認されており、人々の活動をうかがい知ることができる。しかし、現状では、分布が高松平野でも西側に偏在している状況である。

縄文時代に関しても、大池遺跡出土の有舌尖頭器などの少数例を除けば、晚期に至るまで高松平野部での人々の活動の痕跡は現状ではあまり認められない。しかし、晚期頃から平野部への集団の進出が認められるようになる。また、調査地周辺でも、旧河道などから縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての土器片が出土していることや竹元遺跡や川島本町遺跡などの平野部の南側における状況などを考慮すると、平野南部の微高地もしくは讃岐山脈から延び

た丘陵周辺に縄文晚期の集落が存在する可能性が高く、高松平野の南部での埋蔵文化財の調査が待たれるところである。

【弥生時代】

縄文時代晚期から弥生時代前期にかけて鬼無藤井遺跡、林・坊城遺跡、さこ・長池遺跡、井手東遺跡、居石遺跡、前田東・中村遺跡、東中筋遺跡、川岡遺跡、空港跡地遺跡、宮西・一角遺跡、松林遺跡、多肥宮尻遺跡、弘福寺領田岡北地区比定地内遺跡などをはじめとして高松平野の各所で人々の活動の痕跡を確認することができるようになる。明確な居住に関わる遺構は少ないものの、遺跡の広がりや水田の確認例などから、農耕の定着に加え、稲作の開始による生業の変化によって平野部への集団の進出が促進され、集団の活動の痕跡が縄文晚期以降平野部で確認できるようになったものと考えられる。その後、中期にかけては継続的に集落が営まれた形跡はあまり認められず、中期前葉の奥の坊遺跡やさこ・長池遺跡を除けば、次に人々の活動の痕跡を面的に確認できるようになるのは、中期中葉～後葉である。調査地周辺の多肥松林遺跡をはじめとして、さこ・長池遺跡、太田下・須川遺跡などでも集落に関連する遺構や遺物が多数確認でき、近隣に集落が形成された様子が確認できる。その後、中期後半～後期前半は、高松平野の東部で大空遺跡、小山南谷遺跡、奥の坊権現前遺跡、久米山遺跡群などでまとまった資料が認められる。そして、後期後半から終末／古墳時代前期前半にかけて、平野中央部の本調査地周辺や上天神遺跡、圓原遺跡、空港跡地遺跡、前田東・中村遺跡、天満・宮西遺跡、木太中村遺跡、宗高坊城遺跡などをはじめとして集落が再度営まれる状況が確認でき、上天神遺跡や天満・宮西遺跡のような外来系土器がまとまって認められる集落なども存在する。

以上のような弥生時代における集落の移動現象状況を通して把握すると、既に大久保徹也氏（1995）によって指摘されているように高松平野では弥生時代を通じて長期に継続する集落はほとんどなく、自然環境および社会環境等の変化によって集団の移動や再編成が幾度かに渡って起った可能性が想定される。

調査地周辺の状況について述べると、空港跡地遺跡内でも乗松真也氏（2004）によって整理されてい



第3図 空港跡地遺跡周辺遺跡分布図

第1表 空港跡地周辺の遺跡（Noは第3図と対応）

No.	遺跡名	性格	No.	遺跡名	性格
A	空港跡地遺跡	集落			
1	大池遺跡	包含地	41	松林遺跡	集落
2	木太町九区道路	包含地	42	松林遺跡	集落
3	弘福寺第1回調査地	その他	43	松林遺跡	集落
4	林下所遺跡	集落	44	多肥松林遺跡	集落
5	林下所・木太今村遺跡	集落	45	多肥宮尻遺跡	集落
6	林下所遺跡	集落	46	池の内遺跡I	包含地
7	林下所遺跡	集落	47	弘福寺第1回調査地	その他
8	林さき遺跡	集落	48	多肥松林遺跡	集落
9	蛇股遺跡	集落	49	弘福寺第1回調査地	その他
10	居石遺跡	集落	50	多肥松林遺跡	集落
11	井手東久遺跡	集落	51	出口遺跡	集落
(12)	(塙)	塙	52	多肥宮尻遺跡	集落
(13)	(塙)	塙	53	一舟遺跡	集落
14	井手東久遺跡	集落	54	弘福寺第1回調査地	その他
15	さこ共山日道跡	集落	55	空港跡地遺跡	集落
16	さこ共山遺跡	集落	56	一舟遺跡	集落
17	さこ松ノ木道跡	集落	57	空港跡地遺跡	集落
18	林坊城遺跡	集落	58	小浜公民宿舎遺跡	集落
19	林下所遺跡	集落	59	空港跡地遺跡	集落
20	林下所遺跡	集落	60	空港跡地遺跡	集落
21	六条上所遺跡	集落	61	御前庵寺	寺院跡
22	淡佐遺跡	集落	62	御前庵寺	寺院跡
23	多肥下丁所遺跡	その他	63	御遺跡	包含地
24	林宗高遺跡	集落	64	空港跡地遺跡	包含地
25	林宗高遺跡	集落	65	空港跡地遺跡	集落
26	林宗高遺跡	集落	66	空港跡地遺跡	集落
27	宏高坊所遺跡	集落	67	空港跡地遺跡	集落
28	六条所遺跡	集落	68	上林遺跡	集落
29	天皇所遺跡	包含地	69	中林遺跡	集落
30	林宗高遺跡	集落	70	天満宮古墳	古墳
31	御原遺跡	集落	71	北野遺跡	集落
32	日暮・松林遺跡	集落	72	鶴尾西遺跡	集落
33	池の内遺跡II	包含地	73	三谷中帆遺跡	集落
34	日暮・松林遺跡	集落	74	日南海遺跡	遺跡
35	日暮・松林遺跡	集落	75	加摩羅神社古墳	古墳
36	日暮・松林遺跡	集落			
37	日暮・松林遺跡	集落			
38	日暮・松林遺跡	集落			
39	日暮・松林遺跡	集落			
40	多肥松林遺跡	集落			

るよう、集落域は一箇所で通時にまとまって集落が形成されるような状況は認められず、小地域の中でも移動を伴いながら、居住が行われたことが想定される。このような状況は先の大久保氏の指摘とも連動するものであり、この移動を引き起こす歴史上におけるイベントの特定やそのメカニズムの解明が今後の課題である。

【古墳時代】

先述したように、前期前半階まで弥生時代終末期から継続する集落が展開する。その後の集落の変遷については、調査事例が少なくあまり明確ではなく、高松平野では、中期や後期の明確な居住空間が確認されているのは空港跡地遺跡、太田下・須川遺跡、前田東・中村遺跡などである。この他、中間西坪遺跡では、埴輪や土製棺の製作関連遺構が確認されており、後述する今岡古墳との関連で注目されている。

一方、古墳に関しては、鶴尾神社4号墳を皮切りに前期を通じて積石塚が累代的に造営される石清尾

山古墳群をはじめとし、鍬形石が出土した高松市茶臼山古墳、その他に三谷石船古墳、船岡山古墳、六ツ目古墳などの前方後円墳が築造される地域である。

中期の古墳としては阿蘇石製の石棺をもつ長崎鼻古墳や土製棺や形象埴輪が出土した今岡古墳がある。このほかに、淨願寺山南西麓の平野部には相作牛塚古墳、相作馬塚古墳、王墓古墳などの中期から後期にかけて古墳が築造されており、平野部の西側へと主要古墳の分布が移動している点は注目される。

後期には陶棺や銅鏡が出土し、石室に石棚をもつ久本古墳、この他にも小山古墳や山下古墳、T字形石室をもつ瀧本神社古墳などが知られ、平野部を取りかこむ山塊や丘陵上に古墳が築造されている。平野部西側では勝賀山東麓に神高古墳群が形成され、巨石を用いた横穴式石室が築造され、注目される地域である。この他にも後期には石清尾山古墳群や淨願寺山古墳群に代表されるように平野部周辺の山塊に多くの古墳が築造され、社会構造の変化に伴う造営主体の増加が起っていることが想定される。

しかし、これらの古墳の造営母体となった集落などについては依然不明な部分が多く、前期後半以降の集落についてはほとんど何もわかつていない。そのような中、当遺跡周辺では、古墳時代中期の住居址が確認されており、今後の調査例の増加が期待される地域である。

【古代】

古代における高松平野は大きく山田郡と香川郡で構成されていたが、現在の高松市域は、平成17～18年の合併によって、古代の阿野郡の一部も含む状況となっている。

古墳時代後期から古代にかけて、それ以前は、自然堤防として機能していた範囲が埋没し、平野全体の起伏が非常に少くなり、条里地割のような計画的かつ整然とした水田区画の導入が可能となったと考えられている。平野のやや南側を東西方向に横断する南海道が設置された後、高松平野の東部に位置する詰田川、春日川、新川流域部の平野部から平野の西部にかけて、南北軸が東に約9～11度振れた条里地割が広く分布しており、条里地割が面的に施行された可能性が指摘されている。

古代の遺構や遺物が多量にまとまって認められる

のは、前田東・中村遺跡、新田本村遺跡、小山・南谷遺跡、道路状遺構や建物遺構が確認された松縄下所遺跡、複数の建物跡が確認された正箱遺跡などである。現状では、平野東部すなわち山田郡側での古代関連遺構や遺物が多く確認されている状況である。その中でも特に、宝寿寺跡や官的施設との関連が指摘されている前田東・中村遺跡や官衙の遺物が出土している新田本村遺跡が所在する付近は山田郡家（郡衙）が存在した可能性やこれらの諸遺跡が屋嶋城との関連施設としての機能を有していたという可能性が指摘されている。この他にも、郡境を示すと考えられる道路状遺構を確認したさこ・長池Ⅱ遺跡などもある。

当調査地周辺も、先述したように平安時代には周辺の自然河道の埋没がほぼ完了したと考えられる。多肥松林遺跡や多肥宮尻遺跡では人形・畜串や墨書き器が出土しており、律令時代前後の調査地周辺の社会環境の復元が待たれるところである。また、調査地の東部周辺城は、弘福寺領山田団に記載された南地区の範囲として比定されている。この他に調査地の南側では押師庵寺がある。

【中世・近世】

平安時代末（11世紀後半）、高松平野で遺跡数が増加し、特に鎌倉時代以降（13世紀）は六条・上所遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡、キモノドード遺跡、空港跡地遺跡、西打遺跡、中森遺跡、中間西井坪遺跡、西ハゼ土居遺跡、横内東遺跡などをはじめとして多数の集落遺跡が確認されている。その中には、空港跡地遺跡、東山崎・水田遺跡、川南・西遺跡、西打遺跡のように区画施設を有する建物群が展開するものもある。特に空港跡地遺跡は中世における地域社会の変遷や土地利用の状況などについて整理され、村落景観の一端が復元されつつある。

中世における当地域の武士は香西氏、十河氏、由佐氏、神内氏が知られるとともに、これらの在地武士の居館跡である佐料城、佐藤城や詰め城である勝賀城、神内城跡などをはじめとした遺跡や遺構なども調査などによって確認されている。一方、調査地周辺の松林遺跡では香川郡の一条と二条の条界溝と考えられる溝が検出されている。

近世になると、天正16年に生駒親正によって高松城が築かれる。近年、高松城周辺城での発掘調査が実施され、埋蔵文化財の包蔵状況が明らかになる

とともに、絵図などで確認できる武家屋敷等をはじめとする城下町の様相が次第に明らかにされはじめている。空港跡地遺跡でも近世の遺構も多数確認されている

【主要参考文献】

- 山本英之・中西克也編 1992『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
- 高橋 学 1992『高松平野の地形環境—弘福寺領山田郡田園比定地付近の微地形環境を中心にして—』『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
- 高橋 学 1995『平野の微地形変化と開発』『講座文明と環境』6 史歴と気候 朝倉書店
- 太田陽子ほか編 2004『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会
- 長谷川修一・齊藤実 1989『讃岐平野の生いたら第一瀬戸内黒潮流以降を中心として—』『アーバンクボク』28 株式会社クボタ
- 栗松真也 2004『空港跡地遺跡』VI 香川県教育委員会
- 木下晴一編 2001『空港跡地遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬編 2000『空港跡地遺跡』IV 香川県教育委員会
- 大嶋和則・中西克也編 2006『新田本村遺跡』高松市教育委員会
- 大嶋和則編 2004『高松市指定史跡 久本古墳』高松市教育委員会
- 大久保敬也編 1995『上天神遺跡』香川県教育委員会

第Ⅲ章 調査成果

調査成果については、堅穴建物（SH）、墓（SX）、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（SP）の順序で報告を行っていくが、遺構の切り合い関係などから同時に報告することが望ましい遺構については、適宜適切な箇所で報告を行っているので注意いただきたい。

第1節 調査概要

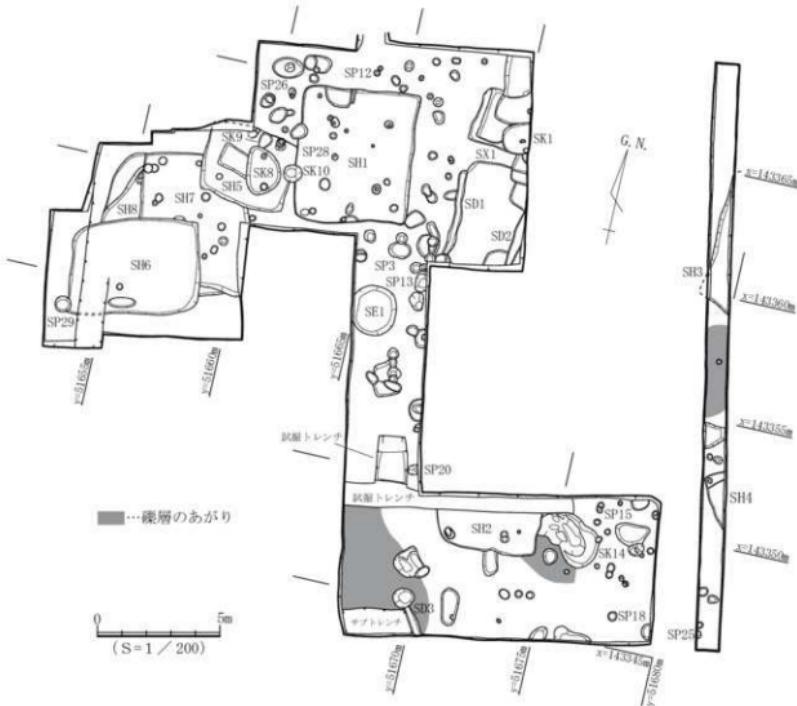
調査区は農地であったことから、表層は耕作土、床土であった。遺構面である地山はこれらの直下で検出される場合もあったが、基本的には遺物を包含了した灰黄褐色粘質シルト層の直下で確認することができた。地山層は非常に極めの細かなにびい黄褐色粘質シルトで水気に弱く、数度の雨で畦などが簡単に崩れる状況であった。

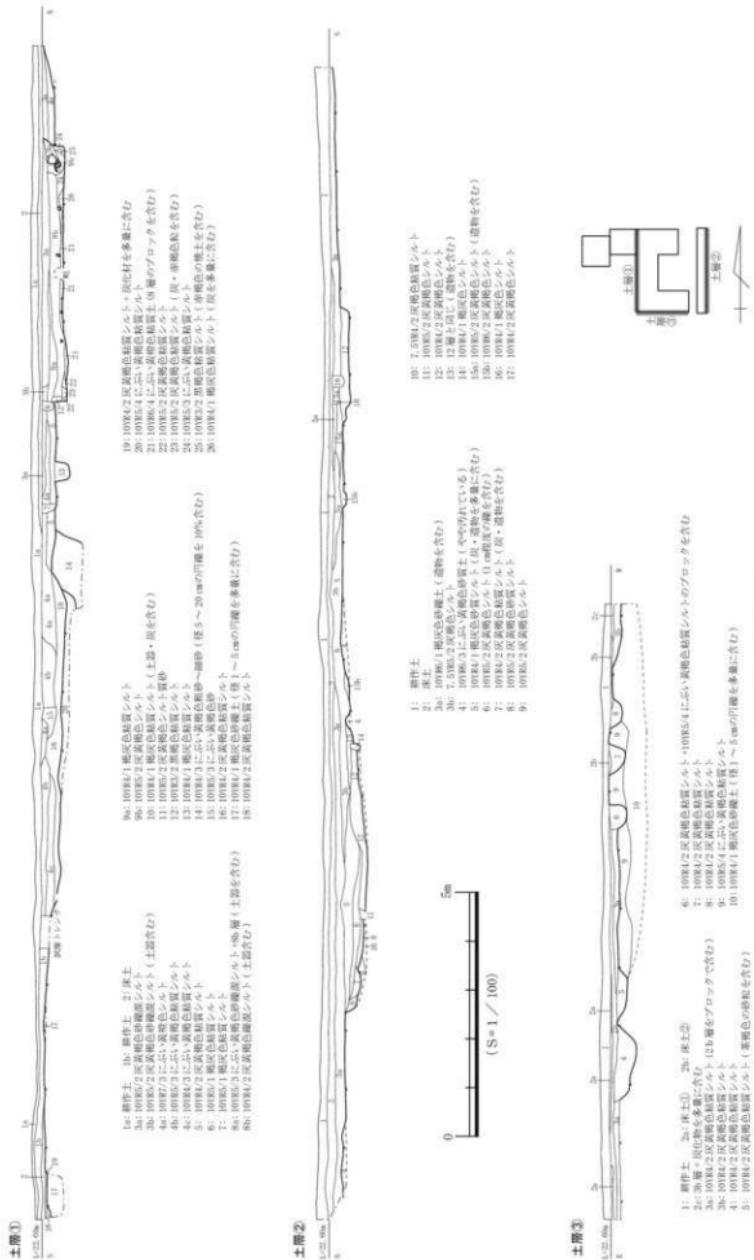
調査地周辺には古墳時代の集落が広がっている状況を改めて確認することとなった。

第2節 基本層序

調査区は農地であったことから、表層は耕作土、床土であった。遺構面である地山はこれらの直下で検出される場合もあったが、基本的には遺物を包含了した灰黄褐色粘質シルト層の直下で確認することができた。地山層は非常に極めの細かなにびい黄褐色粘質シルトで水気に弱く、数度の雨で畦などが簡単に崩れる状況であった。

これらの地山の下層には褐灰色砂礫土が認められ、これらの砂礫土が調査区の南側で地山面で確認できた。これは試掘調査時に、調査地南西隅でも確





第5図 土壠断面図

認できた砂礫層で、円礫を多量に含む状態であった。この砂礫のあがりは調査区のところどころで確認でき、調査区内に微細な高低差を形成している。このような微細な地形は調査区西側の旧河道の存在を示す水路からも明らかなように、旧河道の堆積作用などによって形成されたものと考えられ、その微高地に集落が選地された状況である。

遺構の埋土は、大きく2種類に分けることができ、古墳時代および古代の遺物を包含する遺構は褐色シルトおよびぶい褐色シルトが主体を占め、中・近世の遺物を包含する遺構は暗灰黄色シルトが主体を占める傾向が認められた。

第3節 遺構と遺物

豎穴建物遺構

ここで豎穴建物遺構としたものは、支柱穴を持たないものも含んでおり、厳密に上屋をもつ居住空間もしくは作業場の機能空間としての使用がなされたか否かについては判断できなかったものも含んでいる。その意味で、豎穴建物状遺構とすべきである一群が存在する。

SH 1 (第6・7図)

調査区の北側で確認した長さ5.4m、幅4.8mのやや南北に長い隅丸方形の豎穴建物である。支柱穴は4本で、ロの字状に配置されている。掘り方は個々で異なっている。壁溝はなかった。比較的の残りがよく、遺物の多くが床面直上で検出され、先の土器以外にも完形品が多く、特に遺構の北側では土師器の甕や鉢が据えられた状況で確認でき、生活時の状況をある程度とどめた形で土器が出土した。中央土坑ではなく、24、26の土師器甕が出土した箇所の西側に地山起源の土で構築された土手とその東側に焼土を含む土手が確認できた。この箇所を南北方向に縦断した土層でも落ち込み状の中に土器(24、26)が認められ、炉もしくは竈状の遺構と考えられる。しかし、ちょうど26の出土箇所までが当初の調査区で、西側については後ほど拡張して追加調査を行うこととなったこと、調査時の認識および調査方法によって西側のみで竈状の土手を検出し、全体像を

確認することができなかつた。

また、土師器甕(27)は明確に床面を掘りこんだ後に据えた状況が確認でき、その口縁部には甕の底部が置かれており、甕を重ねて置いたか、割れた底を利用して蓋として利用していたことなどを想定させる出土状況を確認することができた。一方で、甕を逆さにして置いていたことを想定させる出土状況を示すもの(24)もあった。この他に、13、19は須恵器の高杯の蓋をひっくりかえし、その中に小型壺を置いた状況で出土した。これらの出土状況は土師器の保管方法などの当時の日常生活を知る上で大変興味深い。一部炭化した木材が東西方向に伸びるかたちで確認できたことから、焼失住居である。遺物の出土状況から生活道具を残したまま、焼き払ったと考えられることから、緊急的かつ意図的に居住を移したか、何らかの理由で居住者を失い廃墟となつた住居を第3者が焼き払うに至つたことが予想される。

出土遺物から時期は5世紀後半(TK23)と考えられる。

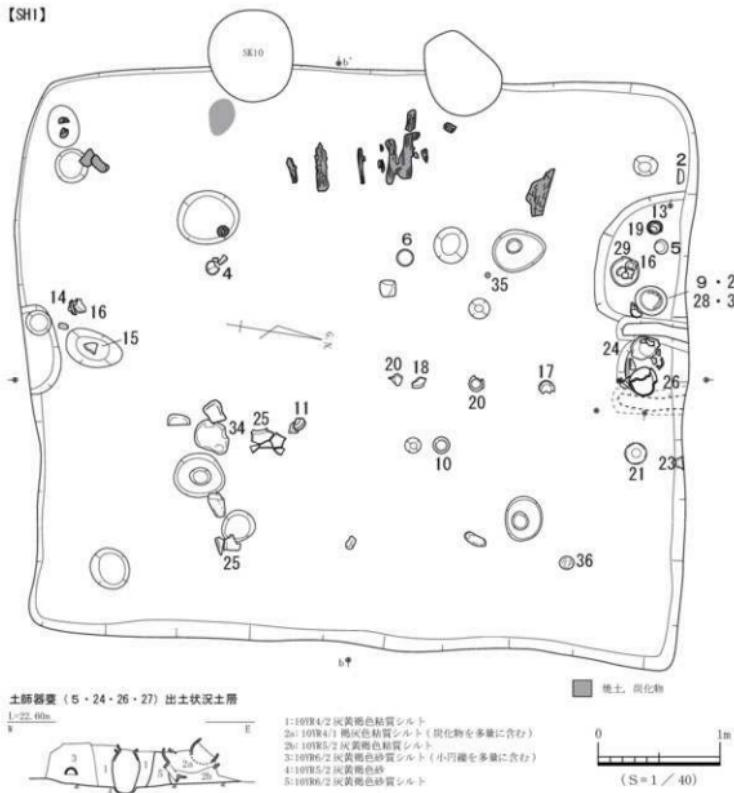
出土遺物(第8~10図)

2、4~6、9~29、34、35は床面から出土したもので、1、3、7、8、12、30~33は埋土掘削中に出土したものである。

1~8、23~33は土師器である。1~7が杯で、8が小型の壺、23~28、30、31が甕、29が鉢である。杯は形態および口縁(唇)部形態にヴァリエーションが認められる。5は口縁部内面に明瞭なヨコナデが認められる。いずれも内外面は剥落が著しいが、内面に底部周辺に指押さえが認められ、底部成形の際に押し出している可能性が高い。外表面は横方向の板ナデ、内面は縦方向の磨き調整で仕上げており、特に内面は非常に丁寧な仕上げになっている。1、4、5は淡橙褐色を呈し、それ以外は淡黄褐色を呈する。杯の胎土は石英、長石に加え、茶褐色の砂粒を含んでいる。

小型壺は作りが粗く、約1.2cm幅で粘土帶接合の痕跡が認められる。石英、長石を多量に含む胎土で、淡橙褐色を呈する。

甕は口縁部形態にはヴァリエーションが認められ、二重口縁もしくは受け口状を呈するもの(23、24)、くの字状を呈し、やや外反するもの(25)、く



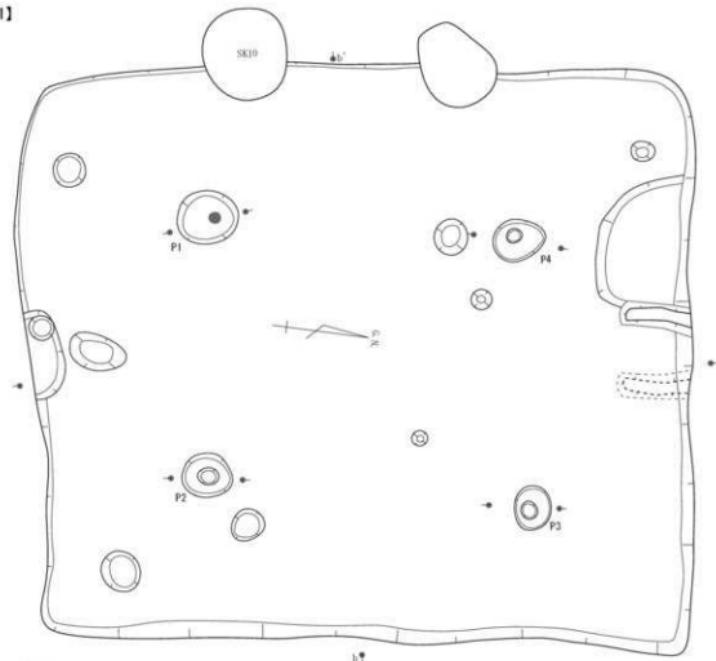
第6図 SH 1 土器出土状況

の字状を呈し、やや内湾し、口唇部が内傾するもの（27, 30）、L字状を呈するもの（31）、直立に立ち上がった後、やや外反するもの（26）などがあり、これらが同一住居から出土していることから考えると機能差が想定される。特に31は器壁が薄く、機能差が想定される。23は淡茶褐色を呈する。24は口頸部を明瞭なヨコナデ調整によって仕上げている。内外面に煤、おこげの付着が認められる。石英、長石を多量に含む胎土で、褐色を呈する。26は外面をヘラ状工具で磨き仕上げを行っているが、内面には多量のおこげが付着し、破片のため調整の詳細は不明である。石英、長石を多量に含む胎土で、淡黄褐色

を呈する。

23～25、27、28は、すべて外面を粗い刷毛目調整で仕上げ、内面は粘土帯の接合位置や底部付近に過度な指押さえ、指ナデの痕跡が認められる（25, 27, 28）。これらの調整は基本的に共通するが、刷毛目原体の違いや、内面のナデ調整の仕上げが先の口縁部形態とほぼ連動して異なっている。25は石英、長石を含む胎土で、茶褐色を呈する。27の内面上半は回転させながらナデを施している状況が認められる。石英、長石を多量に含む粗い胎土で、淡褐色を呈する。28は27の口縁部の中に入っていたものである。内外面にバンド状の煤、おこげが対

[SH1]



南北土層

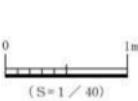
- 11: 砂土
2a: 10YR4/2 黒褐色砂細粒シルト
2b: 10YR4/2 黒褐色砂細粒シルト (土器含む)
3: 10YR7/3 に5: 黄褐色シルト
4: 10YR4/2 黄褐色粘質シルト
5: 10YR5/1 黄褐色粘質シルト
6a: 10YR5/3 に5: 黄褐色砂細粒シルト + Tb (土器を含む)
6b: 10YR4/2 黄褐色細粒シルト (土器含む)

- 7a: 10YR4/1 黑褐色粘質シルト
7b: 10YR5/2 黑褐色シルト
8: 10YR4/2 黑褐色粘質シルト
9: 10YR4/4 に5: 黄褐色粘質土 (B 層のブロックを含む)
10: 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
11: 10YR5/2 黄褐色粘質シルト (炭・赤褐色土を含む)
12: 10YR5/3 (5): 黄褐色粘質シルト
13: 10YR3/2 黑褐色粘質シルト (赤褐色の地土を含む)
14: 10YR4/1 黑褐色粘質シルト (炭を多量に含む)

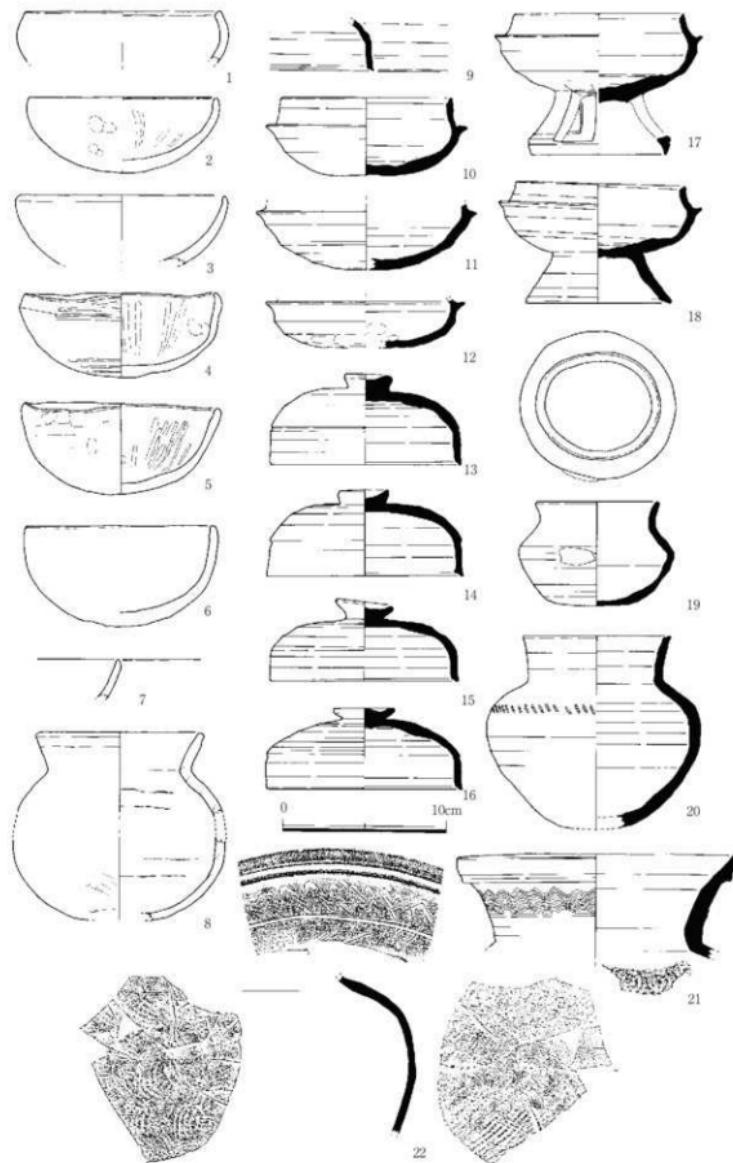
- 1: 10YR3/1 黑褐色シルト (炭化物・遺物を多量に含む)
2: 10YR3/1 黑褐色シルト + 10YR5/2 黄褐色シルト
3: 10YR4/2 黄褐色シルト
4: 10YR5/2 黄褐色シルト
5: 10YR4/3 に5: 黄褐色粘質シルト
6: 10YR4/3 に5: 黄褐色粘質シルト (よくしまる)
7: 10YR7/4 に5: 黄褐色粘質土
8: 10YR3/1 黑褐色シルト (炭化物を多量に含む)



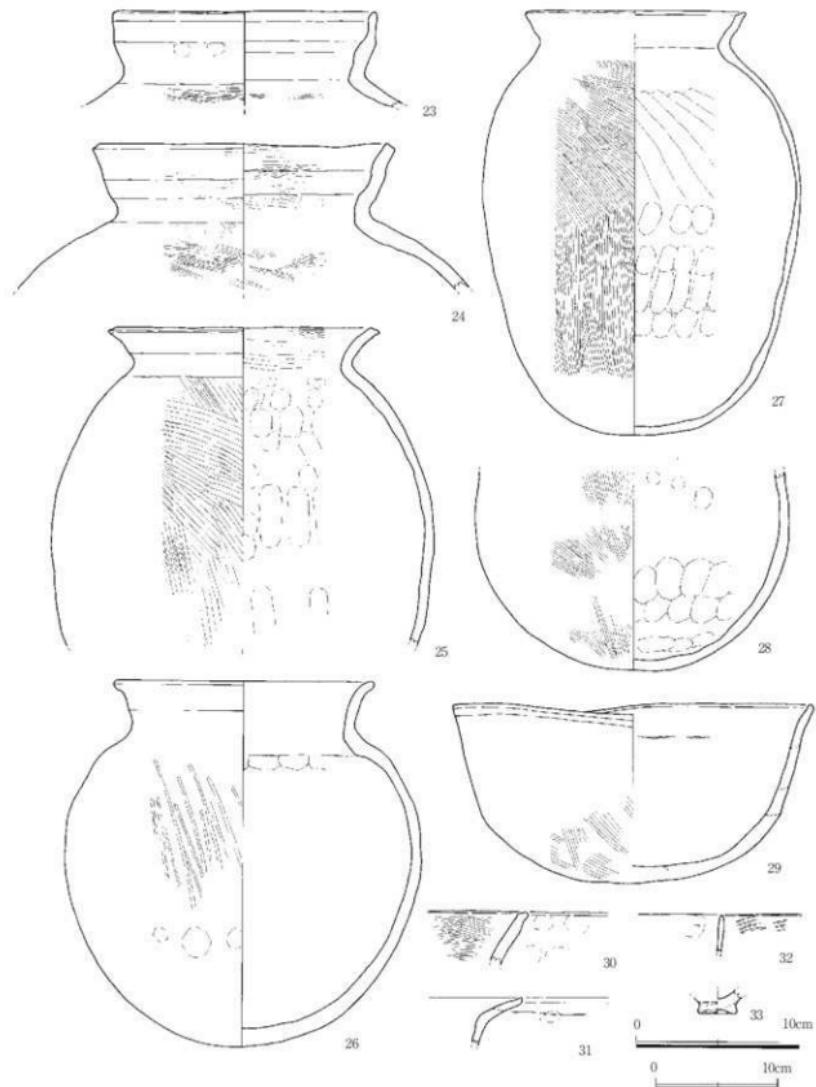
- 1: 10YR5/3 に5: 黄褐色粘質シルト
2: 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
3: 10YR4/2 黄褐色シルト
4: 10YR5/2 黄褐色粘質シルト
5: 10YR4/2 黄褐色粘質シルト (炭化物を多量に含む)
6: 10YR6/3 に5: 黄褐色粘質シルト (炭を多量に含む)



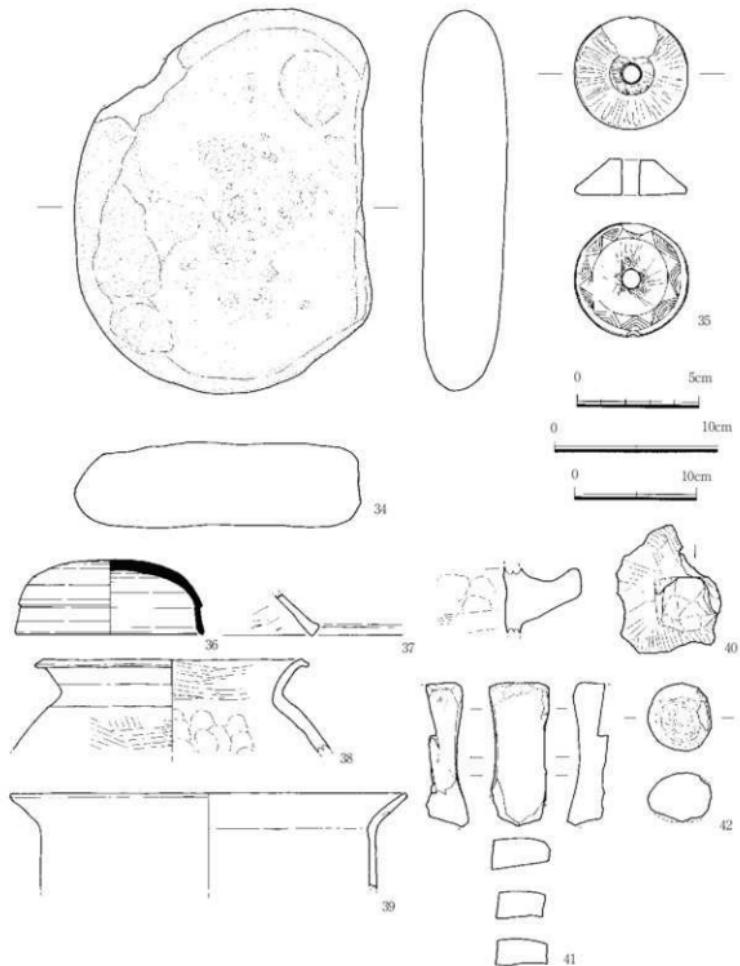
第7図 SH1 平・断面図



第8図 SH1 出土遺物① (1/3)



第9図 SH1出土遺物② (1/4 : 27, 1/3 : その他)

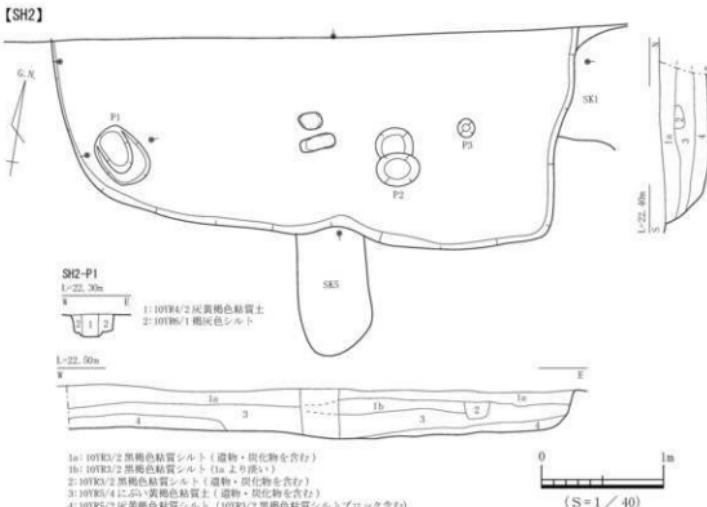


第10図 SH1出土遺物③（1／2：35, 1／4：34, 41, 42, 1／3：その他）

応する形で付着している。石英、長石を含む胎土で、淡黄褐色を呈する。30は外面に口縁部整形段階の指印さえが明瞭に認められる。内面は粗い刷毛目調整で仕上げる。石英、長石を含む胎土で、茶褐色を呈する。31は調整などについては不明であるが、

石英、長石を含む胎土で、茶褐色を呈する。

29は口縁部をヨコナデ調整によって整形する。粘土帯の接合面が認められる。底部は粗い刷毛目調整で仕上げるが、その他の内外面はナデ調整で仕上げている。二次焼成によって胎土は桃褐色を呈する



第11図 SH2 平・断面図

が、本来は淡黄褐色を呈するものと考えられる。

32, 33は製塙器である。32は小型の楕形を呈すると考えられる。外面に叩き整形がなされており、器壁が非常に薄い。石英、長石を多量に含む胎土で、淡黄褐色を呈する。33は脚台付きの製塙器で、脚台は粘土紐によって成形している。茶褐色の砂粒および角閃石を含む胎土で、茶褐色を呈する。

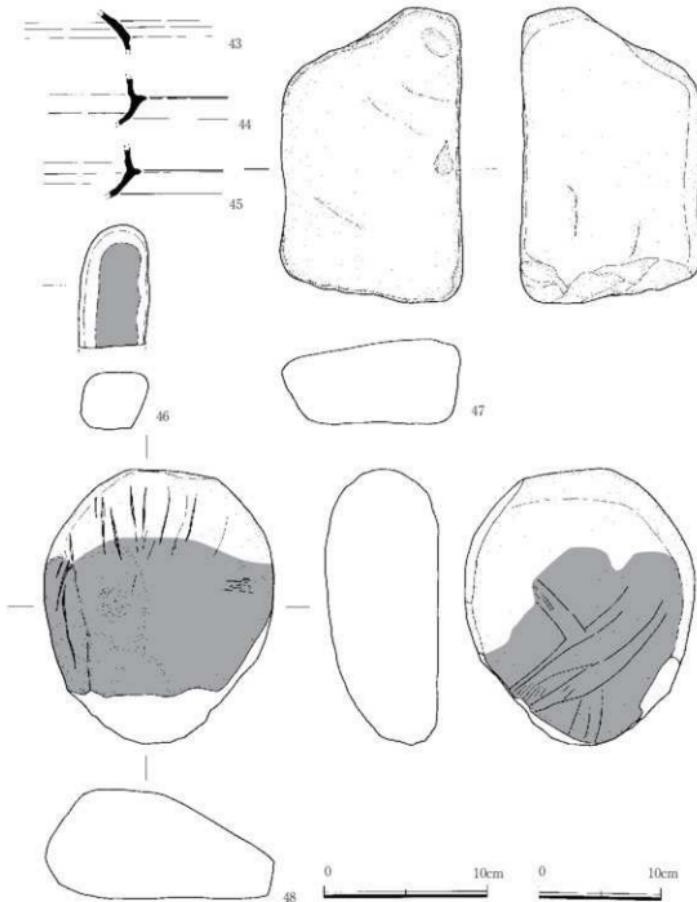
9～22は須恵器である。9が杯蓋、10～12が杯身、13～16が高杯の蓋、17～18は高杯、19が小型壺、20は直口壺、21は広口壺、22は壺の体部である。9は杯蓋としているが、高杯の蓋となる可能性もあるが小片のため、詳細は不明。10, 11は端部調整が非常に丁寧に行われている。底部ヘラ切りの位置が低い。内面のナデ整形の状況は明瞭ではなく、11は内底面を横方向にナデ調整を施す。いずれも長石を含む胎土であるが、10は青灰色、11は灰白色を呈する。12は先の2つに比べてヘラ切りの位置が高く、体部の器高も低い。

13～16はつまみの形態から、大きく13, 14と15, 16の2つに分類できるが、その中でも形態差が認められる。13, 14はつまみの径が3cm未満と小さく、直線的につまみあげるが、13は端部が肥厚し、14はやや尖り気味を呈する。15, 16はつま

みの径が3.5cmと大きく、横方向につまみ出している。これらの4つの蓋はつまみの形態に加えてヘラ切りの位置および段をなす箇所の形態が異なっている。胎土も長石を含むものであるが、色調が異なっている。以上の点から、製作者および生産地の違いが想定される。

高杯は杯部形態およびヘラ切りの位置やヨコナデ調整の施し方等は非常に類似しているが、脚部形態が異なる。17は端部が断面三角形を呈し、台形のすかしをもつ。このすかしは、杯部外面に残る切り取った道具の痕跡から脚部接合後、施している。18は端部をヨコナデによって杯などの端部のように平坦面を持つように整形する。いずれも長石を含む胎土であるが、17は灰白色、18は淡青灰色を呈する。蓋との関係は口径から14, 16と17, 18のいずれかと対応するものと考えられるが、色調が大きく異なっていることから、本来の対応関係を示しているかどうかは不明である。

19の体部には焼成時の付着物が認められる。体部上半は灰および自然釉の付着が著しく詳細は不明であるが、下半はヘラ切りである。淡灰褐色を呈する。20は口唇部を指ナデによって内傾する平坦面を整形し、肩部に刺突文が認められる。21は口頭



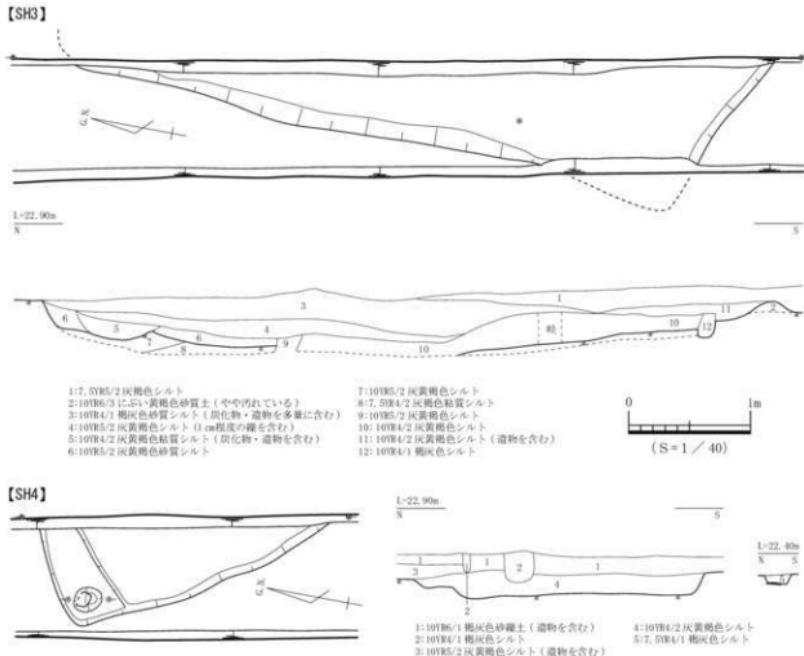
第12図 SH 2出土遺物 (1/3: 43~45, 1/4: 46~48)

部に波状文をめぐらす。長石を含む胎土で、青灰色を呈する。内面に青海波文が残る。22の外面は縦方向の平行叩き目による叩き整形が施され、内面にはその際の當て具痕跡である青海波文が残る。外面は自然釉が著しい。長石を含む胎土で、灰褐色を呈するが、内外面とも表面のみが黒褐色を呈する。

34は平たい砂岩を利用した台石で、中央部に叩

いた痕跡が残る。一部被熱している。

35は石製の紡錘車である。上面は縦方向の磨きで表面を仕上げ、下面も非常に細かな磨きを行なっているものの、特に下面は整形時の凹凸が残る。下面是二本の沈線で縁取られた帯状の空間に山形文をめぐらして装飾を行なっているが、非常に粗雑な施文と言わざるを得ない。上下面ともに使用痕と考えら



第13図 SH 3・4 平・断面図

れる微細な傷が中央の使用時に軸を設置する箇所の周辺に集中して認められ、特に下面は回転して使用された状況を如実に示す痕跡が残っている。

この他に埋土上層から出土した遺物が36～42である。36は須恵器杯蓋である。口径は11.4cmで、器高は4.6cmである。37～40が土師器でいずれも石英、長石を多量に含む胎土で、37は淡黄茶褐色を呈し、その他は淡茶褐色を呈する。37は土師器高杯の脚部と考えられ、内面はケズリ調整である。角閃石を含む。38・39は土師器甌である。38の口縁部は、外半するくの字状を呈する。内外面ともに粗い刷毛目調整で仕上げて、肩部の内面には指押さえを多量に施す。39は31と同様に口縁部はL字状を呈し、他の甌よりも器壁が薄い。被熱の痕跡がある。40は土師器甌の取手である。外面は粗い刷毛目調整で仕上げている。41は小型の砥石で、上面および左側面が使用面である。他の石材とは異な

り、非常に目が細かい。被熱をしている。

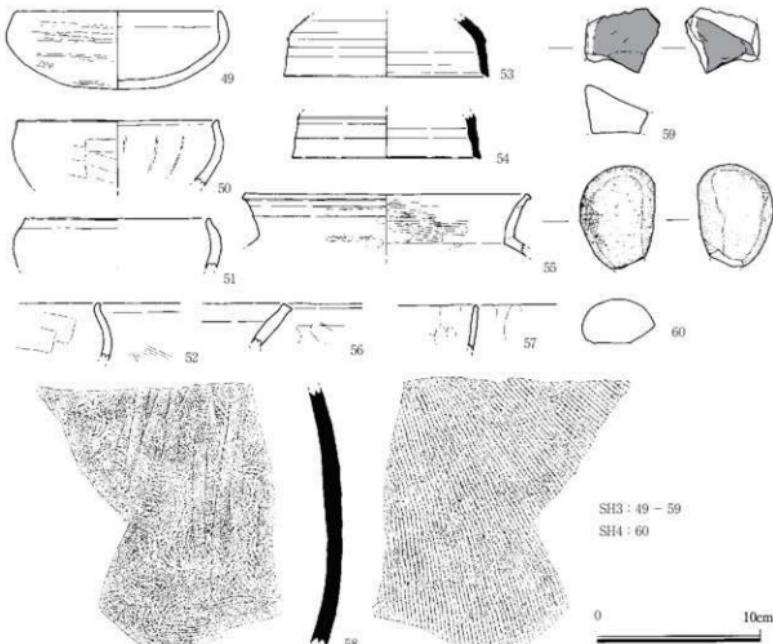
42は砂岩製の小型の叩き石と考えられ、上面に叩きの痕跡が確認できる。一部被熱している。

SH 2 (第 11 図)

調査区南側で確認した隅丸方形の堅穴建物状遺構である。試掘トレンチによって搅乱されているが、さらに調査区外北側へ伸びると考えられる。柱穴を確認したが、支柱穴と断定できる柱穴は確認できていない。出土遺物から時期は5世紀後半～末と考えられる。

出土遺物 (第 12 図)

43～45は須恵器で、43が杯蓋、44、45が杯身である。43は灰白色、44、45は青灰色を呈する。46～48は石製品である。46、48は明確な磨面が認められ、特に後者は鋭い擦痕がいくつも認められ、



第14図 SH 3・4出土遺物 (1/3)

鉄製品などの磨きに使用された可能性が想定される。裏面にも帯状のもので激しく磨ったような痕跡が認められる。47は明確な磨面は認められないが、台石として使用された可能性が想定される。

SH 3 (第13図)

主軸方向が座標北にほぼ一致する調査区東側へと伸びる隅丸方形を呈する竪穴建物と考えられる。調査区の関係から詳細については不明であるが、やや掘り形が不明瞭であり、床面は平坦ではなく、中央部がやや産んでいる。出土遺物から時期は5世紀末(TK47)と考えられる。

出土遺物 (第14図)

49～52, 55～57は土器である。49～52は杯、55, 56は甌、57は製塩土器である。

口縁(唇)部形態は丸くおさめるもの(49)とや

やつまみあげたようになるもの(50～52)があり、ヴァリエーションが認められる。外面は横方向の板ナデ調整と磨き調整によって仕上げるものがある。50は淡暗風の磨きが施される。いずれも石英、長石と茶褐色の砂粒を含む胎土であるが、色調は49, 51, 52が淡橙褐色、50が茶褐色を呈する。

甌はいざれも口唇部を平坦に仕上げ、やや外反するくの字の口縁部形態になるものである。56は小片のため詳細は不明であるが、55は外面に指押さえ、内面に刷毛目調整が施されており、他のものと同様な製作技法である。杯と同様な胎土で、色調は55が淡灰橙色、56が淡橙色を呈する。

57は薄手の製塩土器で、小型の楕円形を呈するものと考えられる。口縁部を指でつまむように成形している。石英、長石のほかに角閃石を僅かに含む胎土で、色調は淡茶褐色である。

53, 54, 58は須恵器で、53, 54は杯蓋、58は甌

の体部である。

蓋は双方ともに口唇部形態を平坦に仕上げ、調整は共通しているが、復元口径が異なる。長石を含む胎土であるが、色調は 53 が青灰色、54 が灰褐色を呈する。

甕の体部は外面が縦方向の平行叩きで成形しており、内面にはその際の当て具の青海波文が残り、その後、ナデを施している。

59 は小型の砥石の破片で、非常に目が細かい石材である。

SH 4 (第 13 図)

SH 3 と同様に調査区東側へと伸びる隅丸方形を呈する竪穴建物と考えられる。調査区の関係から詳細は不明であるが、北東方向の主軸をもつと考えられる。出土遺物から時期を判断することはできないが、他の住居址と同時期と考えられる。

出土遺物 (第 14 図)

60 は砂岩製の小型の叩き石である。被熱している。

SH 5 (第 15 図)

SH 5 は当初方形の土坑（調査時 SK11）と判断していたが、さらに調査区外へと遺構が伸びることから、拡張した結果、竪穴建物である可能性が明らかとなった。SK8 によって、大部分が搅乱されており、詳細は不明な部分が多く、明確な支柱穴はない。

また、壁面が赤く焼けた土坑状のもの（調査時 SK9）を確認した。拡張前に掘削を行い、方形土坑とは別の遺構と認識していたが、方形土坑と考えていたものが拡張後住居址となることが判明し、その北辺のほぼ中央にこの壁の焼けた土坑が位置することから、SH 1 同様に炉もしくは竈状の機能を果たした施設と考えられる。この他、P1 からは須恵器の杯身、土師器蓋が据えつけたように出土した。

以上の結果、長軸 3.8m、短軸 3.2m の東西方向に長い竪穴建物で、竈状施設をもつ。ただし、上屋構造については不明である。出土遺物から時期は 5 世紀後半～末と考えられる。

出土遺物 (第 16 図)

既述のとおり、出土遺物は SK 9、11、SH 5 として取り上げは個別に行ったものの、本来は SH5 に帰

属する遺物と考えられるため、ここでは、まとめて報告しておく。

61、64～71 は土師器である。61 は杯、64、65 は小型壺、66 は広口壺、67～70 は甕、71 は杯である。

小型の杯は手づくねで、指押さえが多量に認められる。石英、長石、茶褐色の砂粒を含む胎土で、色調は淡橙色である。

64、65 は小型壺で同一個体である。指押さえによつて整形の痕跡が著しく、非常に薄手の壺であるが削りの状況は認められない。内外面には煤とおこげの付着が認められる。石英、長石、茶褐色の砂粒を含む胎土で、色調は淡褐色である。

66 は内外面ともにナデ調整によって仕上げている。器壁が薄い。長石を含む胎土で、明橙褐色を呈する。67～70 は口縁部がくの字になる甕で、外面は粗い刷毛目調整で仕上げる。67 は外面の剥落が著しく、詳細は不明である。内面は口縁部が粗い刷毛目調整が施されており、体部は板ナデによる丁寧な仕上げが行われている。底部は指押さえが著しく、底部を押しだした痕跡が認められる。石英、長石を多量に含む胎土で、淡褐色を呈する。68～70 は、外面を縦方向の刷毛目調整で仕上げる。器面の残りが悪いものもあり、共通しているかは不明瞭であるが、口縁部内面は刷毛目調整、体部は指押さえによつて整形している。いずれも煤の付着が著しい。長石、石英を多量に含む粗い胎土で、色調は 68・69 が淡明橙色、70 が褐色である。

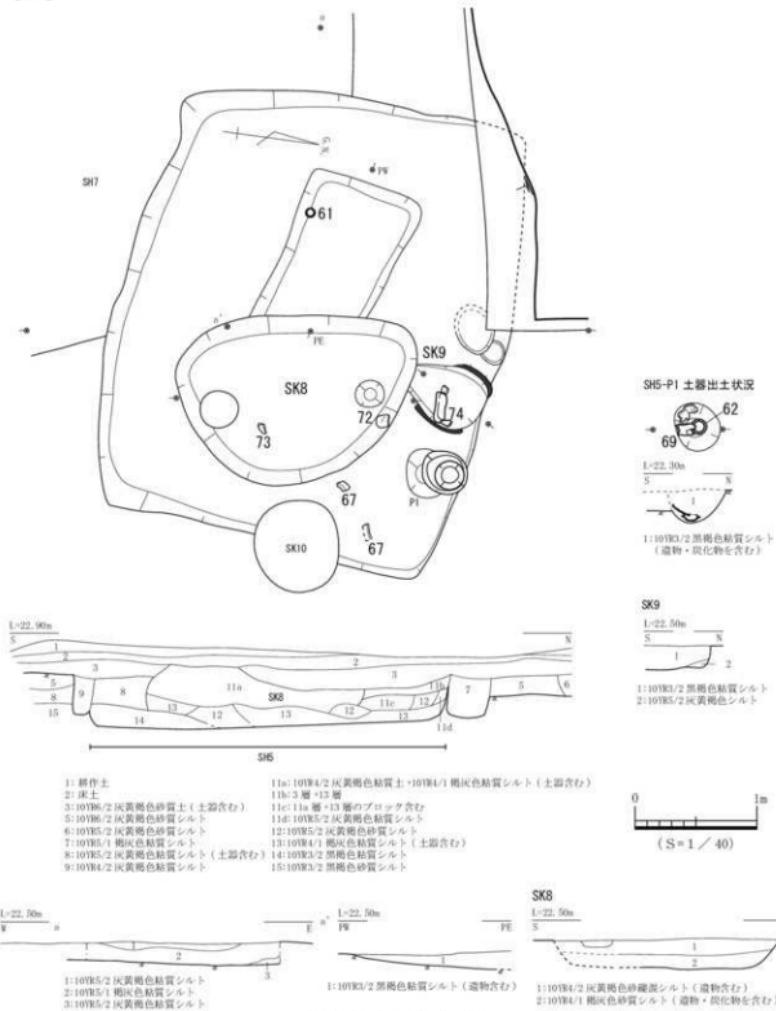
71 は杯で、通常のものよりもやや深く、器壁が薄い。内外面ともに板ナデによる仕上げが行われているが、外面の一部に叩き状の痕跡が認められる。長石を含む胎土で、色調は明橙褐色である。

62、63、74 は須恵器である。62、63 は杯で、74 は壺の底部と考えられる。

62 は口唇部を丸くおさめ、63 は平坦面を形成するように仕上げる。いずれも石英、長石を含む胎土であるが、62 は黒色の砂粒を多量に含む。色調は 62 が青灰色、63 が灰白色である。74 の底部は、外面が 2mm 四方の格子目の叩きによって成形され、内面には指押さえが顕著に残る。

72、73 は砂岩製の石製品で、72 が磨石、73 は台石である。いずれも片面しか残っていないが、72 は磨面が残り、73 は叩き面が残っている。73 は被

【SH5】



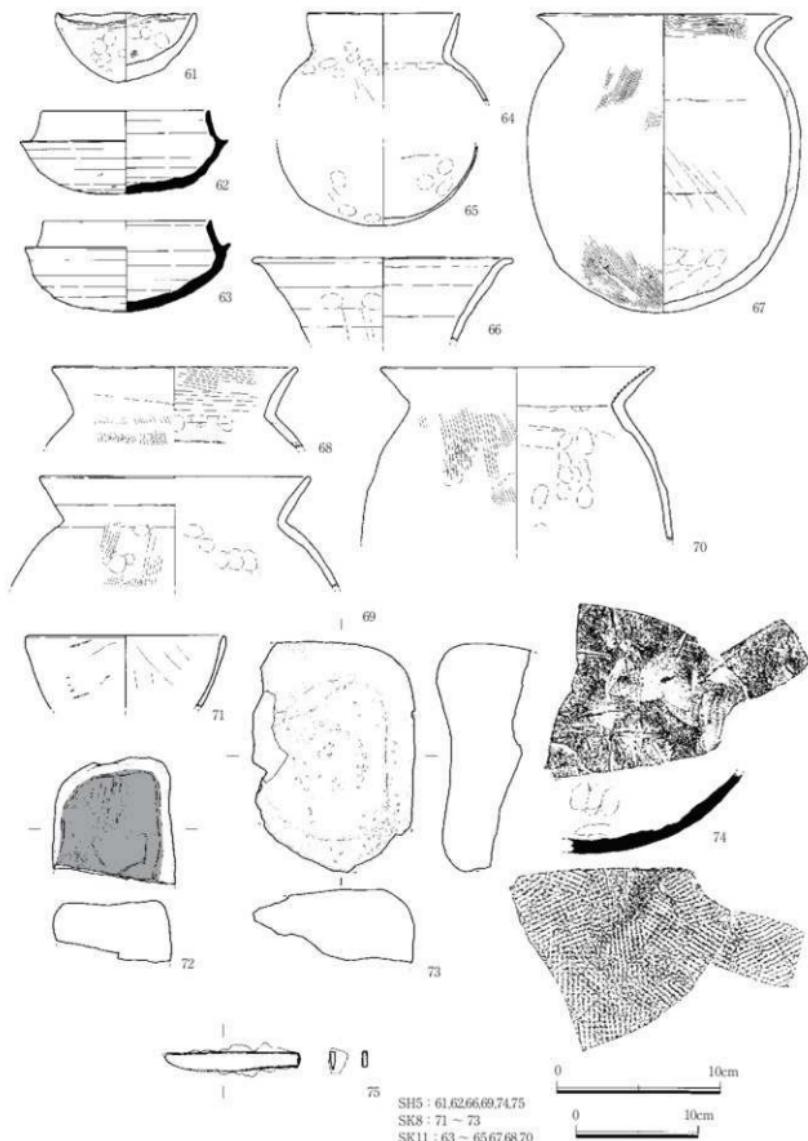
第15図 SH5 平・断面図

熱している。

75は鉄製品で、刀子である。長さ 8.3cm、刃部幅 1.1cm、茎部幅 0.9cm である。

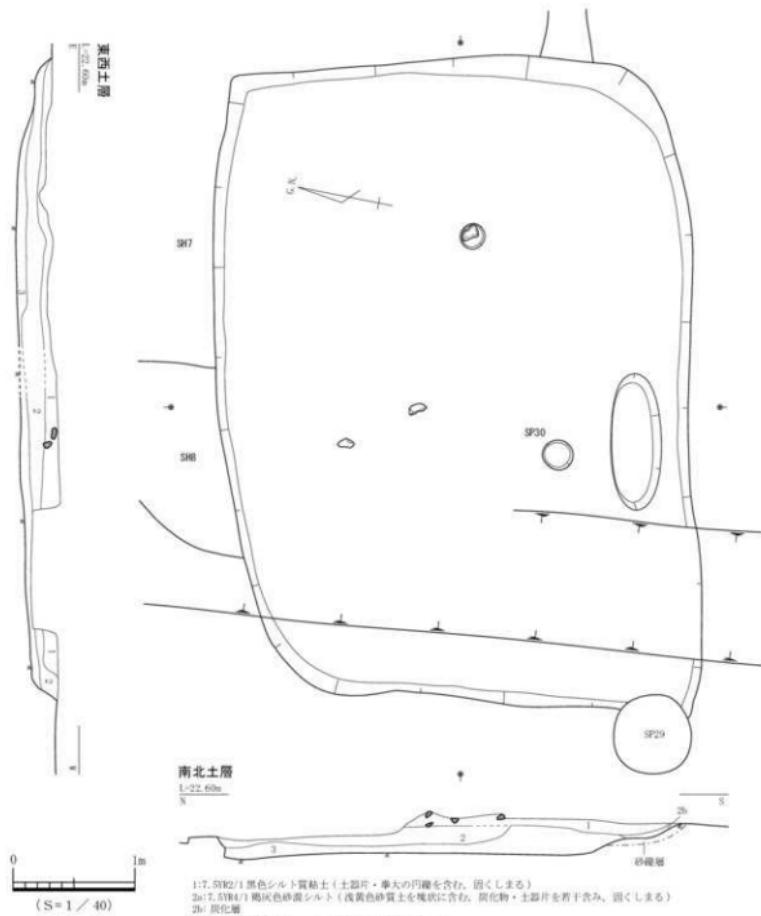
SH 6 (第 17 図)

調査区西側で確認した、長さ 5.3m、幅 3.9m の東西方向に長い隅丸方形の堅穴建物状遺構である。掘り形は明確に確認できたものの、柱穴など、堅穴建



第16図 SH5出土遺物（1／4：72～73, 1／3：それ以外）

【SH6】



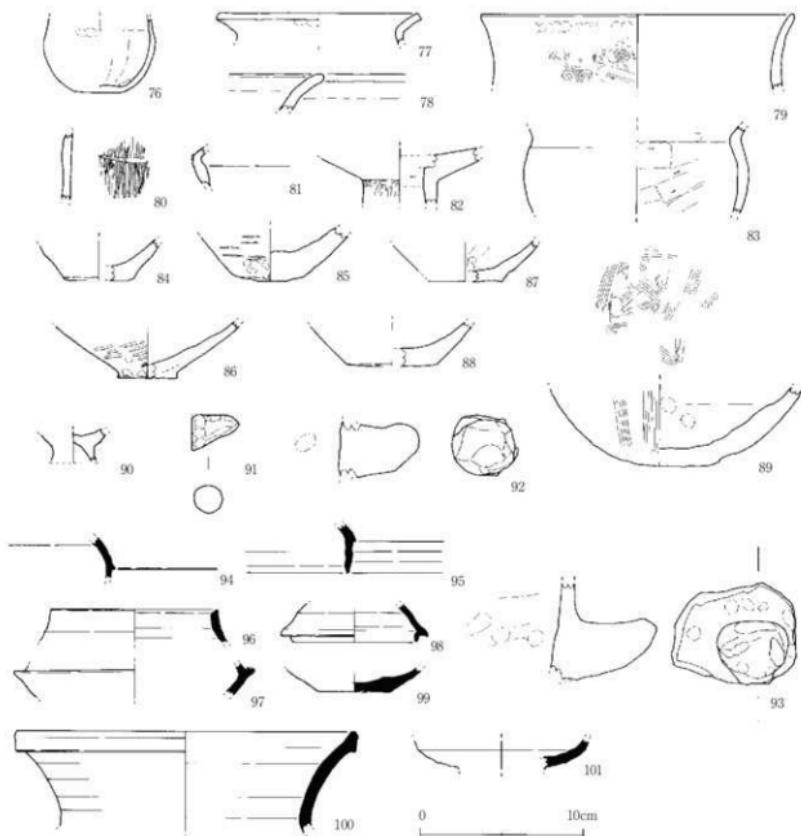
第17図 SH 6 平・断面図

物に特有の諸施設は確認することができなかった。そのため、住居としての機能を有していたか不明と言わざるを得ない。南側で楕円形の炭化物を多量に含む土坑を確認したが、非常に浅く、SH 6 に伴うものではない可能性が高く。SH8 のようないわゆる「一〇土坑」をもつ住居跡が SH 6 によって削平された可能性も考えられる。出土遺物から時期は 5 世紀

後半～末と考えられる。

出土遺物（第18図）

76～93 は土器である。76 は小型壺、77～79 は甌もしくは鉢の口縁部、80, 81 は甌の体部、82 は高杯、83 は鉢、84～89 は底部、90 は製塩土器、91～93 は取手である。



第18図 SH 6出土遺物 (1/3)

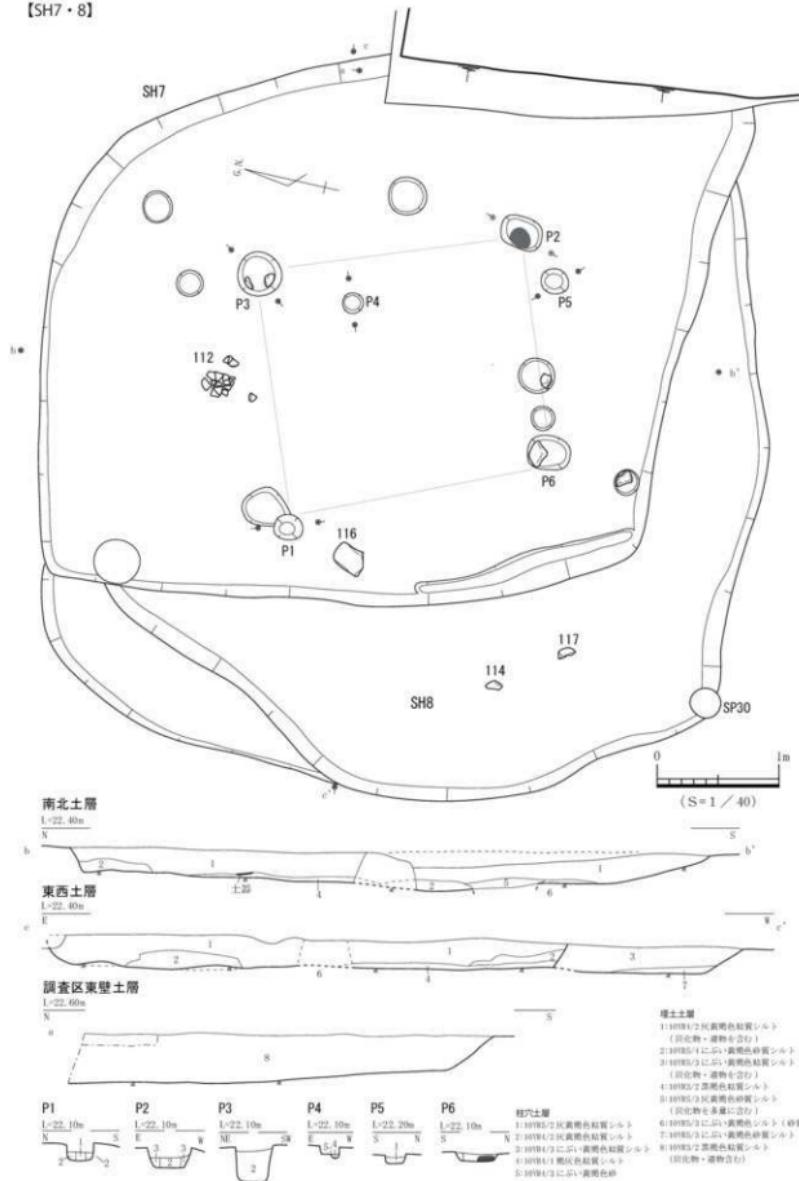
76は小型の土器であるが、全体のプロボーションは不明であるが壺と考えられる。胎土は精良で、色調は淡橙褐色である。底部外面には黒斑が明瞭に残る。

77は古墳時代前期に特徴的な口縁部形態で、混入品と考えられる。石英、長石、角閃石を含む胎土で、色調は淡茶褐色である。78は口縁部片であるが、小片のため詳細は不明である。石英、長石を含む胎土で、色調は淡茶褐色である。79は特異な形態で、鉢のようなものと考えられるが、器形は不明である。

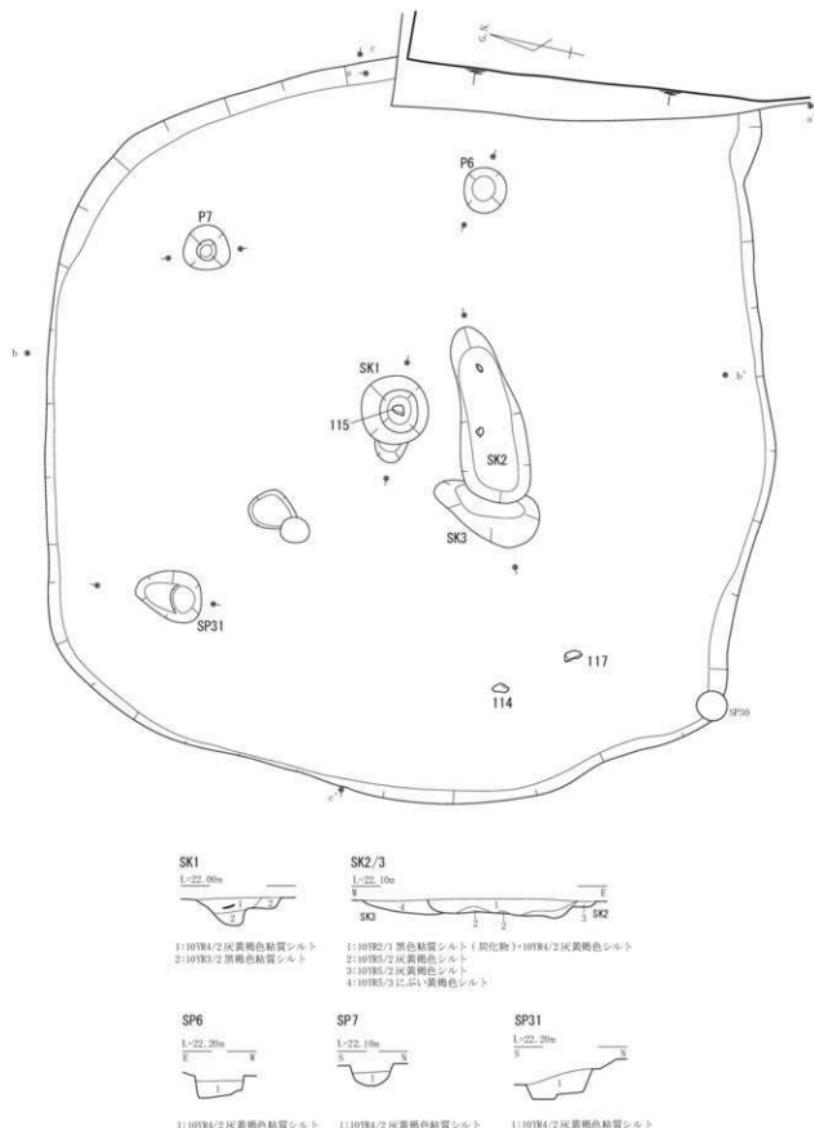
80は甕の体部と考えられ、外面上には文様が施されている。長石、角閃石、雲母を含む胎土で、色調は茶褐色である。81は甕の頸部と考えられるが、小片のため詳細は不明である。長石、茶褐色砂粒を含む胎土で、色調は黄白色である。

82は杯部と脚部の接合部分である。充填部分が欠落している。脚部外面は細かな磨き調整で仕上げている。石英、長石以外に角閃石、雲母を含む胎土

[SH7・8]



第19図 SH 7 平・断面図



第20図 SH 8 平・断面図

で、色調は香東川下流域産土器に特徴的な褐色を呈する。

83は鉢の体部と考えられ、外面は磨滅しているが、内面は削りを施す。石英、長石、角閃石を含む胎土で、表面の色調は明橙褐色である。

84～89は甕もしくは鉢の底部である。形態はヴァリエーションが豊富で、86は底部が突出するタイプで、85、89は丸底に近く、84、88は底部との境の稜が不明稜である。87は平底である。85、86は外面に叩き整形による痕跡が認められる。87は焼成破裂痕が認められる。89は内外面ともに刷毛目調整が施され、煤の付着が認められる。いずれの底部も基本的には石英、長石、茶褐色砂粒を含む胎土であるが、86は角閃石を含む。色調は84が淡黄橙色、それ以外は淡橙褐色である。

90は脚台付きの製塙土器である。被熱による磨耗が著しく、調整などは不明である。石英、長石を含む粗い胎土で、色調は明橙褐色である。

91は小型品での取っ手であるが、器種は不明である。92、93は瓶の取っ手で、92は指押さえが頗る著である。

94～101は須恵器である。94、95、98は杯蓋で、96、97は杯身、99は底部片、100は広口壺、101は高杯である。

杯蓋はいずれも小片のため詳細は不明であるが、94の口唇部付近に沈線状の窪みがある。黒色砂粒を含む胎土で、色調は94が灰白色、95が青灰色である。96、97は杯身の破片で、いずれも長石を含む胎土で、色調は青灰色である。98は杯蓋である。長石、黒色砂粒を含む胎土で、色調は灰白色である。99は底部片であるが、器種は不明である。黒色砂粒を含む胎土で、色調は灰白色を呈する。100は長石、黒色砂粒を多量に含む胎土で、色調は青灰色である。101は17と同様に外面にすかしを施した痕跡が認められる。長石、黒色砂粒を多量に含む胎土で、色調は灰白色である。

SH 7（第 19 図）

SH 6 に切られる形で、さらに下層に 2 つの堅穴建物遺構を検出していたが、平面の切り合い関係から、SH7、SH8 として調査を行った。SH7 と認識した遺構についてはロの字状に配置された 4 つの支柱穴（P 1, 3, 2 / 5, 6）を確認した。P 1, 2 について

は柱痕跡を確認できたが、それ以外については確認することはできなかった。後述するように、SH 8 の中央土坑などが、SH 7 の床面検出段階で確認でき、SH 7 は SH8 の床面をある程度掘り込んで、形成されたことが明らかである。出土遺物から時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

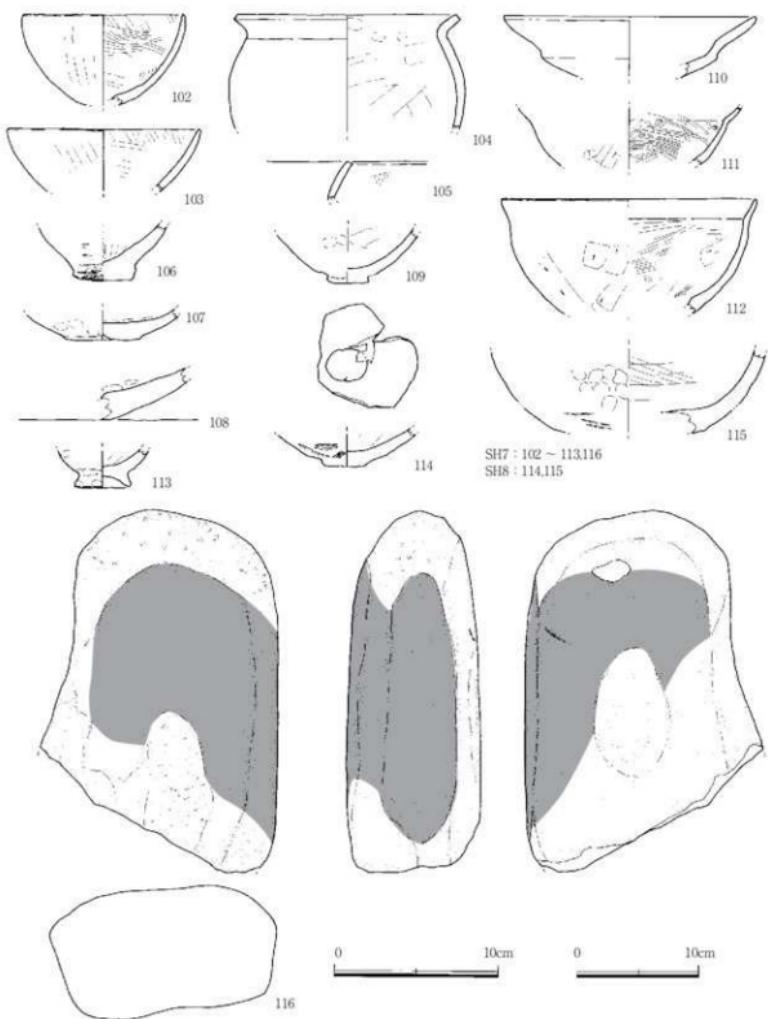
出土遺物（第 21 図）

上記のとおり、SH8 と同一床面であり、SH7 の埋土中から出土したものが 102～113 である。いずれも土師器である。これらの遺物は埋土出土のもので、これらの一一部は SH 8 に伴うものもあると考えられる。床面出土のものは 110 である。

すべて土師器である。102、103 は杯、104・105 は甕、106～109 は甕もしくは鉢の底部、110 は高杯、111・112 は鉢、113 は脚台付きの小型の鉢と考えられる。

102・103 は杯で、外面はナデ、内面は粗い刷毛目調整によって仕上げている。102 は外面に明瞭な黒斑がある。いずれも石英、長石と僅かな角閃石を含む胎土で、色調は明橙褐色である。104 は甕で、外面は磨耗しているため、不明であるが、内面はヘラ削りである。石英、長石、茶褐色砂粒を含む胎土で、色調は淡黄白色である。105 は口縁部片で、詳細は不明であるが、外面に刷毛目調整が認められる。106～109 の底部形態にはヴァリエーションが認められ、106、107、109 は小さな底部が突出するタイプで、108 はやや稜を残す平底である。106 は長石、茶褐色砂粒を含む胎土で、色調は淡茶褐色である。107、108 は石英、長石、茶褐色、角閃石を含む胎土で、色調は明橙色である。109 は長石、角閃石を含む胎土で、色調はチョコレート色である。110 は有稜高杯の杯部である。石英、長石、角閃石を含む胎土で、色調は明茶褐色である。111、112 は小型の鉢である。いずれも外面はヘラ削りもしくは板ナデによる調整で、内面は粗い刷毛目調整である。111 は石英、長石、角閃石を含む胎土で、112 は石英、長石、角閃石、雲母を含む胎土で、色調はいずれも淡明橙褐色である。113 は脚台片で、外面には脚台接合時の指押さえが認められる。長石、角閃石を含む胎土で、色調は茶褐色である。

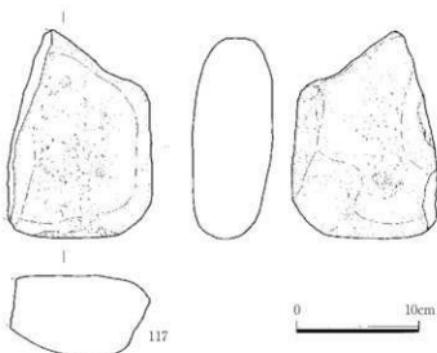
116 は砂岩製の台石である。上面と側面に明瞭な磨面が認められ、下面是僅かに叩きの痕跡が残って



第21図 SH7・8出土遺物（1／4：116、1／3：それ以外）

おり、台石として使用されたものと考えられる。特にSH8（第20図）に側面はかなり使用されている状況を示している。

不整形な円形を呈する中央土坑がいわゆる「一〇土坑」である住居址である。切り合ひ関係および出土遺物から今回の調査区の中で最も古い段階の住居



第22図 SH 8出土遺物（1／4）

跡である。上記のとおり、この中央土坑についてはSH 7の床面検出段階で確認でき、当初はSH 7に伴うものと考えていたが、位置が偏っていたことから検討課題であったが、その後、SH 7と8の間の畦を撤去したところ、SH 8に伴うものであることが確定した。支柱穴はP 6, 7, 31を確認したが、もう一箇所については確認することはできなかった。出土遺物から弥生時代終末期から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物（第21・22図）

SH 8に帰属する遺物は114, 115, 117である。114, 117は床面から、115は中央土坑から出土した。

114, 115は土師器の甕の底部である。114の外面は叩き整形を行い、内面はナデ調整で仕上げる。石英、長石、角閃石、黒色砂粒を含む胎土で、色調は明橙色である。115は甕の底部、外面に叩き整形、内面に粗い刷毛目調整が認められる。内外面に黒斑、煤とおこげの付着が認められる。長石、角閃石、茶褐色砂粒を含む胎土で、色調は褐色である。

117は砂岩製の台石で、上下面に叩き痕跡が残っている。

墓

SX 1 (第 23・24 図)

調査区の北東隅に位置し、主軸方向は南北方向でほぼ座標北と一致する。長さ 2.3m、幅 1.15m の床面が疊床の木棺墓である。

SX 1 は、複数の土坑が切り合っていた箇所を一段掘り下げて、その切り合い関係を見定める際に検出した。結果から述べると、遺物のレベルまでは非常に良好な形で残っていたが、それより高い箇所は、後世の造構によって大規模に削平されており、奇跡的に副葬された土器などが残っていた状況であった。

床面は上面の平坦な拳大から人頭大の砂岩を用いて平坦面を形成するように敷き詰めていた。その上に、棺台と考えられる大型の砂岩をほぼ棺設置範囲に相当する箇所に配置している。ただし、平坦面を形成するような石材の設置方法ではないため、あくまで想定である。しかし、棺台と想定した根拠は土器がこれらの石の上に寄りかかっていること、これらの石材の上で釘が確認されていること、これらの石材の検出レベルまでは出土土器の状況も踏まえて攪乱を受けておらず、土器は副葬時の状況をそのままとどめていると考えられることなどである。

また、本来の掘り方を同様な石材で積上げて、石椁状に構築していたかは明らかではない。

この他、疊床および棺台に使用された石の中には図面に示したように煤や被熱の痕跡を示すものが複数認められた。これはこの木棺墓の構築の過程もしくは葬送儀礼等に伴って生じたものではなく、構築に必要な石材の獲得を周辺の古墳時代の住居址に残る当時の生活道具として使用された砂岩製の石材（炉などで使用されたもの）から行ったためである。すべての石について観察を行った結果、被熱痕跡以外にも使用痕を確認できたもの（132～134）があり、まさに転用であることを裏付けることができた。

出土した鉄釘の配置（135、136、138、139、140、142、143、144、146、147）と鉄釘に残された木質から箱型の木棺の遺体を埋葬した状況を復元することができた。先の土器と疊床との関係、後述する土器の副葬状況から、木棺の大きさは長さ 1.5m、幅 0.7m ほどと考えられる。

土器類は北側に大型の須恵器壺（131）が据えら

れ、木棺の両側に添うように、北西部に一部重ねた状態で須恵器杯（118、122、124）と黒色土器楕（125～127）を、そのちょうど斜め対面方向に当たる南東部側に須恵器杯（119～121、123）と須恵器の小型壺（130）が置かれていた。この他に木棺墓部分に位置する箇所から須恵器の小型壺、黒色土器のミニチュア壺（128）が出土した。特に後者はほぼ中央で出土した。これらの土器は先の大型の石材の上にもたれかかるように検出されており、本来は棺に寄りかかるように副葬されたものが、棺が朽ちた後、やや棺内側へと傾いたものと考えられる。このような状況から、土器の副葬については棺外に副葬していたものと考えられる。

この他、現場にて土を箇にかけて、人骨などの検出を試みたが、確認できなかつた。

この木棺墓は出土遺物から時期は 9 世紀後半と考えられる。

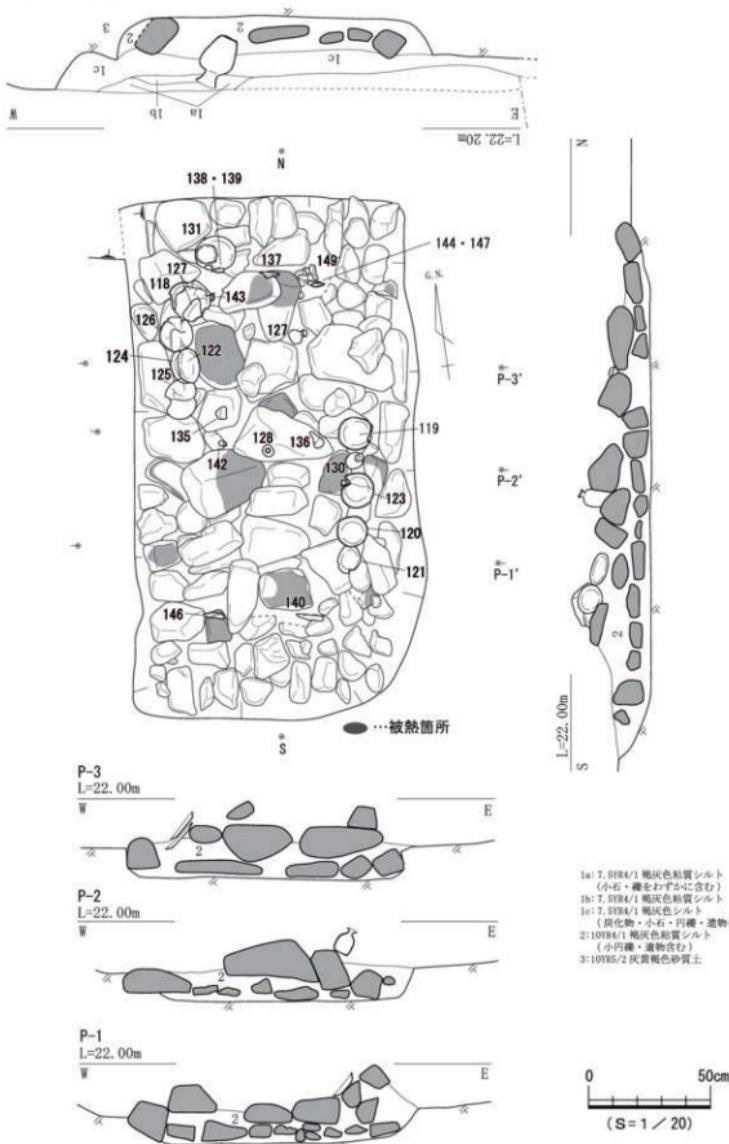
出土遺物（第 25～26 図）

118～124、129～131 は須恵器である。杯は色調および形態（大きさ）で、118、123 と 119～122、124 の二つのグループに分けることができる。前者は小型のもので青灰色を呈する。後者は一般的な大きさのもので灰白色を呈する。いずれもロクロ成形により、ヨコナデ調整が明瞭である。底部はヘラ切りである。ひだすきおよび重ね焼きの痕跡が明瞭に認められる。129～131 は壺である。129、130 は形態および大きさも近隣では例を見ないもので、供獻用の特注品の可能性が考えられる。ただし、口縁部および体部の形態はいずれも異なり、129 は丸くおさめ、130 は口縁部を直線状につまみ出し、131 は平坦におさめる。130 は在地での生産品と考えられるが、同時期の壺のプロポーションが不明確で、類例がない。同時期の篠窯の壺 C と形態的に非常に似ているが、底部はヘラ切りであり、在地産と考えられる。

125～128 は黒色土器である。125～127 は片桐分類（片桐 1992）の楕 A で、器壁は薄く、直線的にハの字に開く形態である。内面は黒色化し、外面は橙褐色に焼き上げている。128 は小型の壺で非常に珍しい形態であり、須恵器同様、特注品の可能性が想定される。

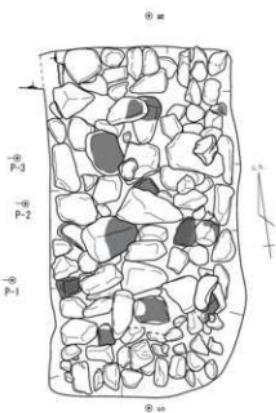
132～134 は砂岩製の石製品である。いずれも、使用痕が認められ、132、133 は上面に磨面として

【SX1 遺物出土状況】

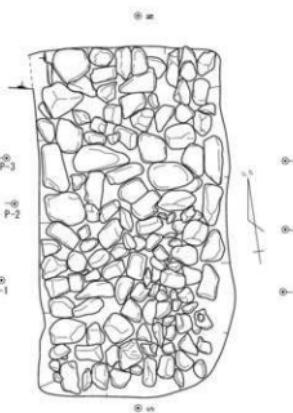


第23図 SX1平・断面図

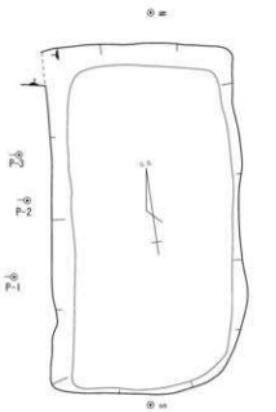
遺物撤去状況（被熱石の分布状況）



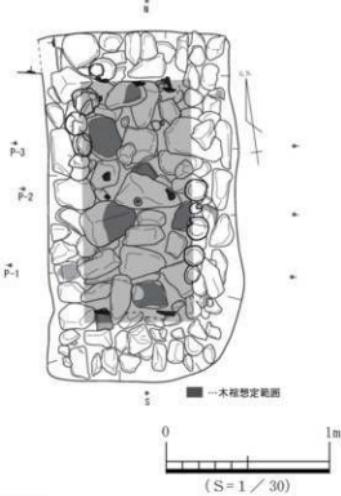
下層出土状況



石敷き撤去状況



棺設置想定箇所

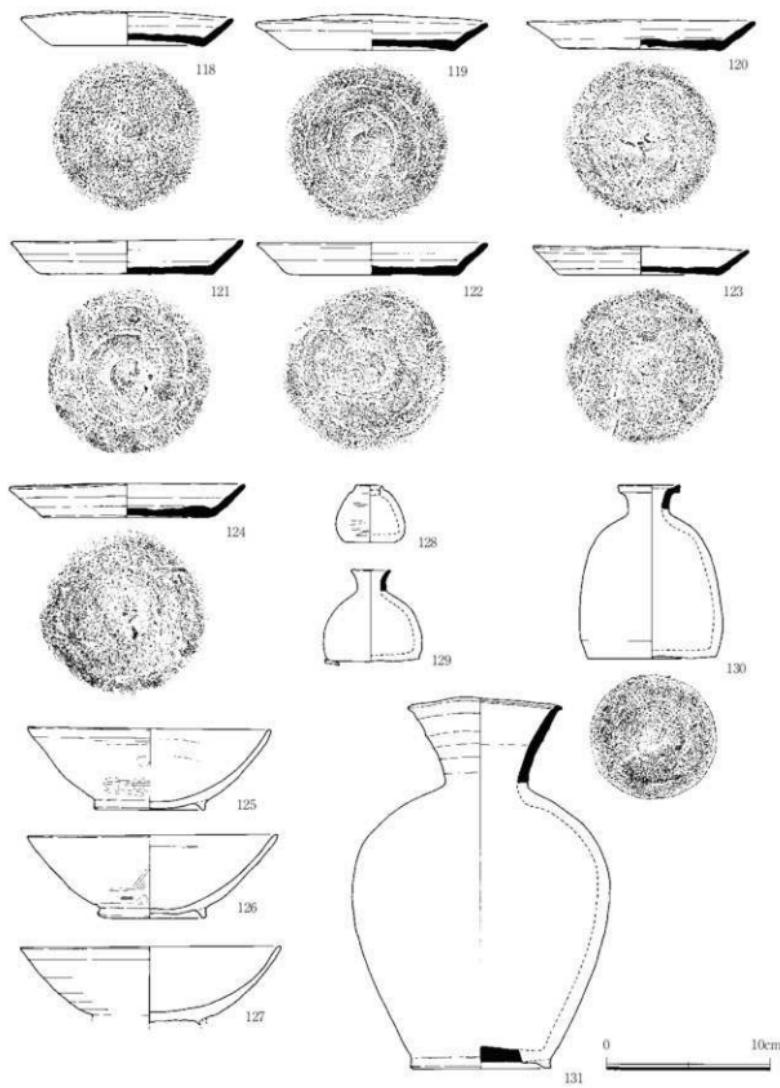


第24図 SX1 平面図

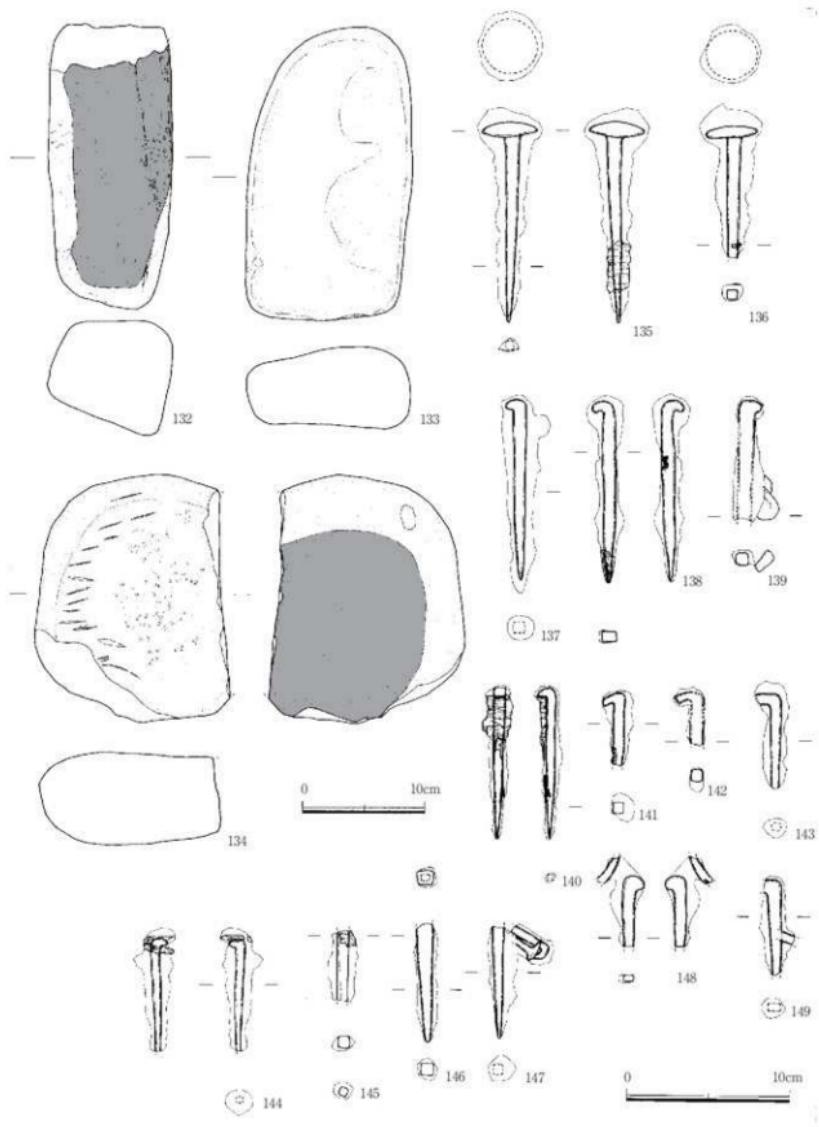
使用されており、134は上面に擦痕と叩き台としての痕跡が認められる。擦痕は48よりはやや浅く、周辺の磨耗もあり、やや不明確である。下面是磨面として使用されている。132, 133は多量に煤が付着しており、134は被熱痕跡が認められる。これら

は既述したとおり、棺台として近くの住居址にあつた石材を転用したものと考えられる。

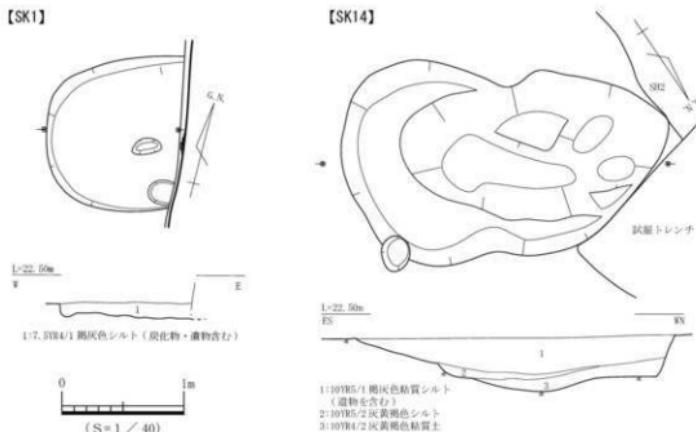
135～149は鉄製品で、棺を構成していた釘である。135, 136は釘頭がボタン状を呈するもので、それ以外のものはL字状に折り曲げている。錆のた



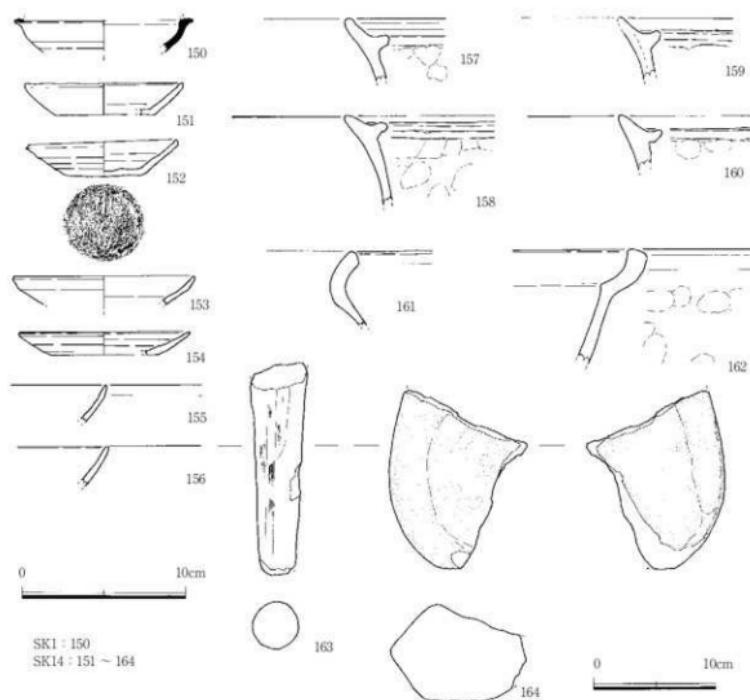
第25図 SX 1出土遺物① (1/3)



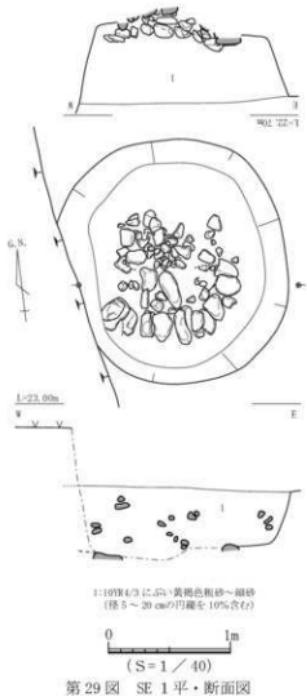
第26図 SX 1出土遺物② (1/4 : 132~134, 1/3 : それ以外)



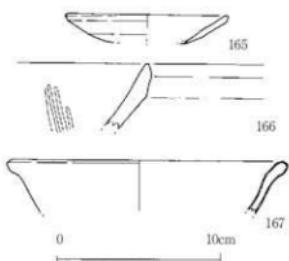
第27図 土坑平・断面図



第28図 土坑出土遺物 (1 / 4 : 164, 1 / 3 : それ以外)



第29図 SE 1 平・断面図



第30図 SE 1 出土遺物 (1/3)

め不明瞭なものも存在するが、いずれも断面方形のものである。ただし、146のみが中空の部分が存在する。既述したとおり、135、136、138、140、141、144、145には木質が付着している。

土坑

SK 1 (第27図)

調査区北東隅に位置し、SX1の南東隅を切っている。一部は調査区東側へと伸びる。隅丸方形状を呈する土坑で、検出範囲で、長幅1.25m、短幅1.1mを測る。深さは0.11mと浅く、埋土は炭化物および遺物を含む褐灰色シルトである。出土遺物からすると時期は古墳時代後期と考えられるがSX1との切り合い関係から考えると、9世紀後半以後の時期となり、出土遺物は混入と判断できる。

出土遺物 (第28図)

150は須恵器の杯身である。青灰色を呈する。

SK14 (第27図)

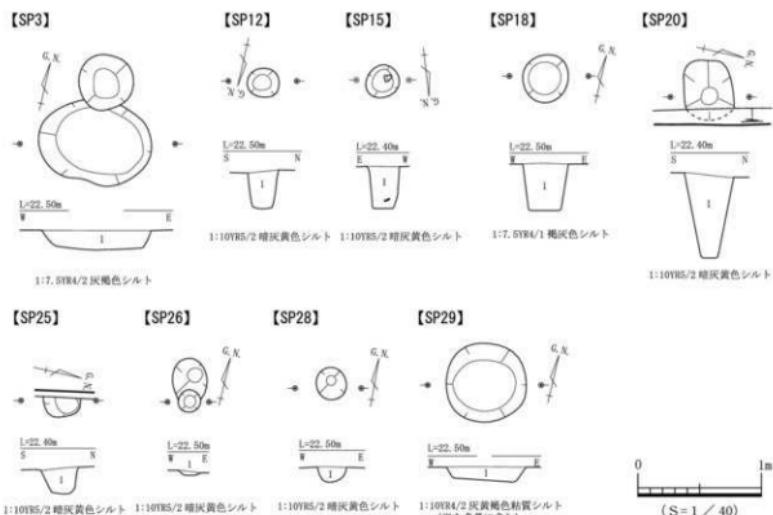
調査区南東隅に位置する。長さ2.7m、幅1.5～1.6mの北西方向に長い楕円形を呈する土坑である。最も深い箇所で0.44m、埋土は3層に区分でき、上から褐灰色粘質シルト、灰黄褐色シルト、灰黄褐色粘質土である。南東側に三日月状を呈するテラスがある。出土遺物には時間幅が認められるが、新しい時期のものは15世紀初頭～前半頃と考えられる。

出土遺物 (第28図)

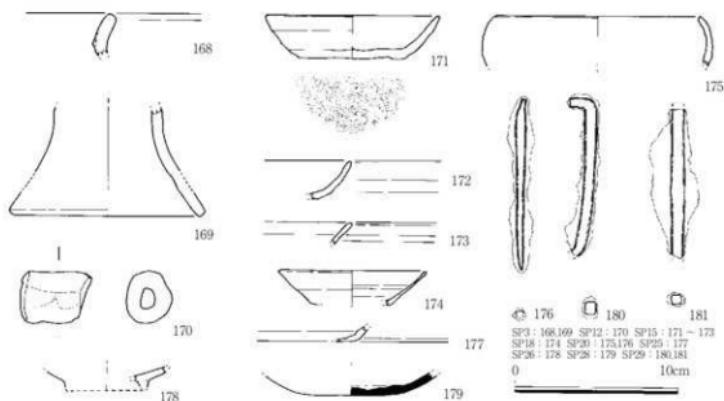
151～163は土師質土器である。

151～156は杯である。152は板状圧痕が僅かに認められる。154は非常にシャープなつくりである。いずれも精良な胎土で、淡橙白色もしくは淡橙色を呈する。

157～160、163は足釜の口縁部と脚部である。157～160は佐藤分類(佐藤1995・2000)の足釜B I～II類である。いずれも細かい石英、長石を含む胎土であるが、色調が異なっており、157は茶褐色、158は淡黄褐色、159は淡橙色、160は淡橙白色である。163は外面を丁寧な指ナデによって仕上げている。161は甌の口縁部で、内外面ともに磨滅が著しい。162は鍋の口縁部で、佐藤分類B III類(佐藤1995・2000)である。外面は煤の付着が著しい。162は明確な加工痕は認められないが、加工したと考えられるもので、破片のため機能の推定はできないが、台石状のものと考えられる。灰赤褐色を呈する砂岩である。



第31図 SP 平・断面図



第32図 SP出土遺物 (1/3)

井戸

SE 1 (第29図)

調査区中央部に位置する。砂岩円礫を使用した石組みの井戸であるが、埋め戻す際に大規模に壊されたのか、井戸枠として構築されていたと考えられる。

石は最下層部分でさらに南側にしか残されていなかった。埋土はにぶい黄褐色粗砂で5~20cmの円礫を含む单層で、一度に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物から時期は15世紀後半と考えられる。

出土遺物（第30図）

165・166は土師質土器である。165は杯で、赤褐色の砂粒を含み、胎土は淡橙色を呈する。166が擂鉢で長石を多量に含み、胎土は茶褐色を呈する。

165は青磁の碗である。出土遺物から15世紀後半～16世紀と考えられる。

その他の柱穴**SP3（第31図）**

調査区の北側SH1の南側に位置し、長幅0.9m、短幅0.65mの東西方向に長い梢円形を呈するビットである。深さは0.16m、埋土は灰褐色シルトである。出土遺物からは時期を特定できない。

出土遺物（第32図）

168は土師器の甕もしくは小型壺の口縁部と考えられる。169は土師器の高杯脚部である。

SP12（第31図）

調査区のSH1北側に位置し、直径0.25mのやや不正形な円形を呈するビットである。深さは0.3m、埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物から時期は特定できない。

出土遺物（第32図）

170は土師質土器の取っ手と考えられる。中空である。

SP15（第31図）

調査区の南東隅に位置し、直径0.28mのやや不正形な円形を呈するビットである。深さは0.34m、埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物から時期は中世と考えられる。

出土遺物（第32図）

171～173は土師質土器の杯である。171、173は茶褐色の砂粒を多量に含み、黄褐色を呈する。172は白色の非常に精良な胎土である。171は糸切りである。

SP18（第31図）

調査区南東隅に位置し、直径約0.36mの円形を呈する。深さは0.38mで、埋土は褐灰色シルトである。

出土遺物（第32図）

174は土師質土器の杯である。胎土は精良で、淡橙白色を呈する。

SP20（第31図）

調査区東部の中央に位置するピットで、検出範囲で一辺0.4mの隅丸方形を呈するピットである。深さは0.68mで、埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物は鉄製品などから古代以降と考えられる。

出土遺物（第32図）

175は土師器の杯である。176は鉄製品で、釘状を呈するが、釘頭が細く加工されており、機能は保留せざるを得ない。

SP25（第31図）

調査区の南東隅に位置し、検出範囲で長幅0.3m、短幅0.1m隅丸方形を呈するピットである。深さは0.16m、埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物は小片であり、時期は特定できない。

出土遺物（第32図）

177は土師質土器の杯である。胎土は精良で、灰白色を呈する。

SP26（第31図）

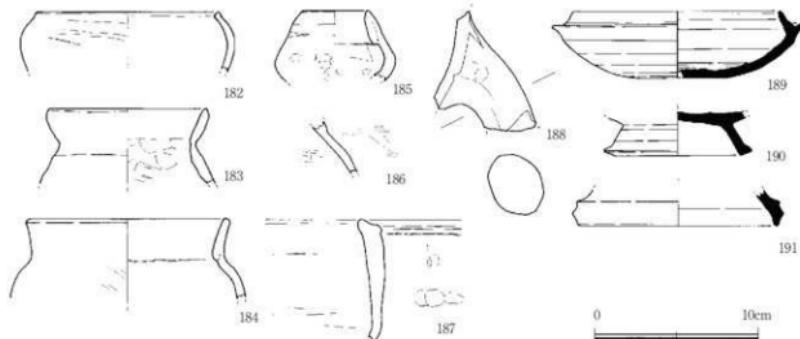
調査区の北西隅に位置し、直径0.18m円形を呈するピットである。深さは0.04m、埋土は暗灰黄色シルトである。時期は出土土器小片のため、詳細は不明である。

出土遺物（第32図）

178は土師質土器の椀の底部である。

SP28（第31図）

調査区の北側に位置し、SH1を切っている。直径0.28m円形を呈するピットである。深さは0.12m、埋土は暗灰黄色シルトである。時期は出土遺物から古墳時代後半期と考えられる。



第33図 その他の出土遺物（1／3）

出土遺物（第32図）

179は須恵器杯身の底部である。外面は回転ヘラ切りである。青灰色を呈する。

SP29（第31図）

調査区南西隅に位置し、SH 6を切っている。直徑約0.65mのやや不整形な円形を呈する。深度は0.1m、埋土は灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物からは時期は特定できないが、古代以降と考えられる。

出土遺物（第32図）

180、181は鉄製品である。いづれも釘で、断面方形を呈する。180は釘頭をL字状に折り曲げたものである。

その他の出土遺物（第33図）

機械掘削時などの出土遺物である。182は土師器杯である。183、184は土師器の小型壺である。ともに灰白色を呈し、粗い胎土である。185は土師器で、小型の不明土器である。口縁部を折り曲げによつて厚みを形成している。内外面に指押さえが多く施されている。186は土師器甕の体部と考えられる。187は土師質土器足釜で佐藤分類C（佐藤1995・2000）である。外面は煤の付着が著しい。188は土師質土器足釜の脚部である。189～191は須恵器で、189は杯身、190、191は高杯の脚部である。189は

TK209形式相当と考えられる。190は低脚で、端部は外側へと踏ん張る形態である。191は脚部端部に断面三角形状の突帯をもつ。

【参考文献】

片桐孝浩編 1992『川津元結木遺跡』香川県教育委員会

佐藤竜馬編 1995『国分寺橋井遺跡』香川県教育委員会

佐藤竜馬編 2000『空港跡地遺跡』IV 香川県教育委員会

第IV章 まとめ

調査の成果からもあきらかにのように、本遺跡は様々な時代の人々によって重層的に形成された歴史的空间といえ、小規模な調査ではあったが、人々の様々な営みの痕跡を伺い知ることができた。ここでは、下記の2点について、調査のまとめを行っておきたい。

古墳時代の集落

古墳時代5世紀後半段階の集落および須恵器の生産地ははつきりわかつてないのが現状である。弥生時代集落よりも確認された事例が非常に少なく、高松平野では弥生時代の集落が展開する範囲とはやや異なる範囲に古墳時代（特に後半期）の集落が展開しているよう、その中で空港跡地遺跡や日暮松林遺跡の調査例から考えると、弥生時代集落の近隣に、その集落が展開していることは間違いない、今後の周辺での調査が期待されるところである。

以上の状況から、今回の調査で出土した資料を古墳時代史の中で位置づけるには、今後の資料の蓄積を待たねばならないであろう。そのため、今回の調査成果を踏まえて、今後の調査の課題についてまとめておきたい。

5世紀後半段階の住居址は太田下・須川遺跡や空港跡地遺跡などで数例確認されていたが、住居址の構造についてはあまりよくわかつていなかった。今回の住居址の調査の中で、竈状施設を一部確認でき、当該期の地床炉から竈への変革期に当たる可能性が想定されることは大きな成果であった。しかし、調査内容は十分なものではなく、今後の調査例の増加による検証が必要であるということは第Ⅲ章で既述のとおりである。

また、SH 1からは既述のとおり、当時のくらしのあり方を知ることのできる多様な土器が出土し、古墳時代のくらしの移り変わりを考えいく上で、非常に良好な資料と言える。これらの資料については、今回の畿内地域の編年に対応させて年代決定を行ったが、今後の資料の増加を待って、香川における年代的位置づけについて検討を行う必要があり、その際に基準資料になるものと考えられる。

平安時代の墓地

空港跡地遺跡では9世紀後半段階の集落および墓地等状況を具体的に示す資料はほとんど認められない。同様に、同時期の県内の埋葬事例にも同様な事例は現状で認められない。そのため、この被葬者がどのような出自の人であるのか、どのような社会の中でこのような墓地が形成されたのかを明らかにすることは困難な現状である。

そのような中で、非常に特殊もしくは希少な副葬品は認められなかつたものの、県内でも非常に珍しい副葬のあり方や非常に丁寧な埋葬のあり方は、この地域における重要な役割を担つた人である可能性が想定できる。近隣には拝師廢寺があり、仏教施設との関係性についても検討する必要が考えられる。

まとめ

以上のように多くの課題が残されているが、今後の調査の重要な基礎になる資料であると考えられる。今回は小規模な調査であったが、この調査地の東および南側にも遺跡が広がっていることが既に試掘調査などで明らかになりつつあり、調査地周辺における今後の調査成果の積み上げが必要である。

第2表 遺物法量一覧表

番号	種類	断面	法量(cm)		番号	種類	法量(cm)		番号	種類	法量(cm)			
			直横	直縦			直横	直縦			直横	直縦		
1	土	棒	(11.82	6.15	29	土	棒	(14.4)	16.27	153	土	棒	(11.6)	1.1*
2	土	棒	11.8	6.1	30	土	棒	(12.49)	6.67	154	土	棒	(19.5)	16.40
3	土	棒	11.8	6.15	74	土	棒	11.5	6.0	155	土	棒	2.25*	
4	土	棒	11.8	5.1	76	土	小型壺	6.5*	(2.6)	156	土	棒	2.4*	
5	土	棒	11.8	5.6	77	土	壺	(12.1)	1.9*	157	土	棒	3.8*	
6	土	棒	11.6	6.1	78	土	壺	2.2*		158	土	棒	5.4*	
7	土	棒	-	2.45*	79	土	壺	(19.0)	6.6*	159	土	棒	3.7*	
8	土	小型壺	(9.8)	11.5*	80	土	壺	6.1*		160	土	棒	3.3*	
9	土	壺	-	2.1*	81	土	壺	2.4*		161	土	壺	4.55*	
10	土	壺	10.4	4.7	82	土	壺	3.4*		162	土	壺	7.0*	
11	土	壺	10.4	4.7	83	土	壺	3.5*		163	土	壺	12.7*	
12	土	壺	10.4	4.7	84	土	壺	2.5*	(14.4)	164	土	壺	7.5*	
13	土	壺	11.6	5.6	85	土	壺	3.3*	6.5	165	土	壺	4.0*	
14	土	壺	12.0	5.3	86	土	壺	3.5*	(3.6)	166	土	壺	(8.6)	3.2*
15	土	壺	11.6	5.0	87	土	壺	2.5*	(4.4)	167	土	壺	2.6*	
16	土	壺	12.0	4.9	88	土	壺	2.1*	(5.6)	168	土	壺	6.5*	(11.2)
17	土	壺	(10.6)	8.4	18(20)	土	壺	4.7*		170	土	壺	3.2	
18	土	壺	10.3	7.4	89	土	壺	1.9*	(2.8)	171	土	壺	(10.3)	2.6
19	土	壺	7.4	6.4	90	土	壺	2.3*		172	土	壺	2.35*	
20	土	壺	7.0	6.4	91	土	壺	2.3*		173	土	壺	1.4*	
21	土	壺	17.0	2.0	92	土	壺	2.5*		174	土	壺	(8.8)	2.1*
22	土	壺	-	6.6*	93	土	壺	2.5*		175	土	壺	3.05*	
23	土	壺	15.9	5.8*	94	土	壺	3.0*		177	土	壺	0.9*	
24	土	壺	17.4	6.9*	95	土	壺	2.05*		178	土	壺	1.2*	(5.4)
25	土	壺	15.6	7.9(5)	96	土	壺	2.0*		179	土	壺	1.4*	4.0
26	土	壺	15.6	22.6	97	土	壺	2.3*		181	土	壺	(11.0)	3.65*
27	土	壺	17.8	34.7	98	土	壺	1.4*	(4.4)	182	土	小型壺	(9.6)	4.6*
28	土	壺	12.1*		100	土	壺	2.0*	(20.7)	183	土	小型壺	(12.0)	4.9*
29	土	壺	21.7	11.0	101	土	壺	2.3*		185	土	壺	(4.0)	4.3*
30	土	壺	17.3	2.0	102	土	壺	2.5*		186	土	壺	7.65*	
31	土	壺	-	6.0*	103	土	壺	2.5*		187	土	壺	7.65*	
32	土	壺	-	2.3*	104	土	壺	2.0*		188	土	壺	7.2*	
33	土	壺	-	2.3*	105	土	壺	2.3*		189	土	壺	12.7	4.1
34	土	壺	11.5	5.1	106	土	壺	3.4*		190	土	壺	2.6*	(7.2)
35	土	壺	15.8	6.7*	107	土	壺	3.5*	(3.8)	191	土	壺	2.2*	(12.0)
36	土	壺	10.8	6.7*	108	土	壺	3.15*						
37	土	壺	-	2.3*	109	土	壺	3.4*						
38	土	壺	(24.2)	5.9*	110	土	壺	2.5						
39	土	壺	-	2.3*	111	土	壺	3.8*						
40	土	壺	7.0	5.1	112	土	壺	2.5*	(15.4)					
41	土	壺	2.35*		113	土	壺	3.8*						
42	土	壺	2.35*		114	土	壺	2.3*						
43	土	壺	2.35*		115	土	壺	2.3*						
44	土	壺	2.35*		116	土	壺	2.3*						
45	土	壺	2.35*		117	土	壺	2.3*						
46	土	壺	12.6	4.7	118	土	壺	2.3*						
47	土	壺	(12.2)	6.1*	119	土	壺	2.3*						
48	土	壺	(11.2)	3.1*	120	土	壺	2.3*						
49	土	壺	10.3	5.5	121	土	壺	2.3*						
50	土	壺	11.5	5.1	122	土	壺	2.3*						
51	土	壺	11.5	5.1	123	土	壺	2.3*						
52	土	壺	11.5	5.1	124	土	壺	2.3*						
53	土	壺	(11.4)	3.65*	125	土	壺	2.3*						
54	土	壺	(11.4)	2.7*	126	土	壺	2.3*						
55	土	壺	(17.3)	2.0*	127	土	壺	2.3*						
56	土	壺	-	2.3*	128	土	壺	2.3*						
57	土	壺	-	2.3*	129	土	壺	2.3*						
58	土	壺	-	2.3*	130	土	壺	2.3*						
59	土	壺	9.6	4.1	131	土	壺	2.3*						
60	土	壺	10.4	2.3*	132	土	壺	2.3*						
61	土	壺	10.3	5.5	133	土	壺	2.3*						
62	土	壺	10.3	5.5	134	土	壺	2.3*						
63	土	壺	9.2	5.4*	135	土	壺	2.3*						
64	土	壺	9.2	5.4*	136	土	壺	2.3*						
65	土	壺	9.2	5.4*	137	土	壺	2.3*						
66	土	壺	10.0	2.5*	138	土	壺	2.3*						
67	土	壺	(16.0)	3.2*	139	土	壺	2.3*						
68	土	壺	(16.0)	3.2*	140	土	壺	2.3*						
69	土	壺	(16.0)	3.2*	141	土	壺	2.3*						
70	土	壺	(16.0)	3.2*	142	土	壺	2.3*						
71	土	壺	10.4	2.0	143	土	壺	2.3*						
72	土	壺	10.4	2.0	144	土	壺	2.3*						
73	土	壺	10.4	2.0	145	土	壺	2.3*						
74	土	壺	2.3*		146	土	壺	2.3*						
75	土	壺	2.3*		147	土	壺	2.3*						
76	土	壺	2.3*		148	土	壺	2.3*						
77	土	壺	2.3*		149	土	壺	2.3*						
78	土	壺	2.3*		150	土	壺	2.3*						
79	土	壺	2.3*		151	土	壺	2.3*						
80	土	壺	2.3*		152	土	壺	2.3*						
81	土	壺	2.3*		153	土	壺	2.3*						
82	土	壺	2.3*		154	土	壺	2.3*						
83	土	壺	2.3*		155	土	壺	2.3*						
84	土	壺	2.3*		156	土	壺	2.3*						
85	土	壺	2.3*		157	土	壺	2.3*						
86	土	壺	2.3*		158	土	壺	2.3*						
87	土	壺	2.3*		159	土	壺	2.3*						
88	土	壺	2.3*		160	土	壺	2.3*						
89	土	壺	2.3*		161	土	壺	2.3*						
90	土	壺	2.3*		162	土	壺	2.3*						
91	土	壺	2.3*		163	土	壺	2.3*						
92	土	壺	2.3*		164	土	壺	2.3*						
93	土	壺	2.3*		165	土	壺	2.3*						
94	土	壺	2.3*		166	土	壺	2.3*						
95	土	壺	2.3*		167	土	壺	2.3*						
96	土	壺	2.3*		168	土	壺	2.3*						
97	土	壺	2.3*		169	土	壺	2.3*						
98	土	壺	2.3*		170	土	壺	2.3*						
99	土	壺	2.3*		171	土	壺	2.3*						
100	土	壺	2.3*		172	土	壺	2.3*						
101	土	壺	2.3*		173	土	壺	2.3*						
102	土	壺	2.3*		174	土	壺	2.3*						
103	土	壺	2.3*		175	土	壺	2.3*						
104	土	壺	2.3*		176	土	壺	2.3*						
105	土	壺	2.3*		177	土	壺	2.3*						
106	土	壺	2.3*		178	土	壺	2.3*						
107	土	壺	2.3*		179	土	壺	2.3*						
108	土	壺	2.3*		180	土	壺	2.3*						
109	土	壺	2.3*		181	土	壺	2.3*						
110	土	壺	2.3*		182	土	壺	2.3*						
111	土	壺	2.3*		183	土	壺	2.3*						
112	土	壺	2.3*		184	土	壺	2.3*						
113	土	壺	2.3*		185	土	壺	2.3*						
114	土	壺	2.3*		186	土	壺	2.3*						
115	土	壺	2.3*		187	土	壺	2.3*						
116	土	壺	2.3*		188	土	壺	2.3*						
117	土	壺	2.3*		189	土	壺	2.3*						
118	土	壺	2.3*		190	土	壺	2.3*						
119	土	壺	2.3*		191	土	壺	2.3*						
120	土	壺	2.3*		192	土	壺	2.3*						
121	土	壺	2.3*		193	土	壺	2.3*						
122	土	壺	2.3*		194	土	壺	2.3*						
123	土	壺	2.3*		195	土	壺	2.3*						
124	土	壺	2.3*		196	土	壺	2.3*						
125	土	壺	2.3*		197	土	壺	2.3*						
126	土	壺												

写 真 図 版





1 SX1 上層検出状況



2 SH1 土器出土状況



SX 1 出土土器



SH1 出土遺物



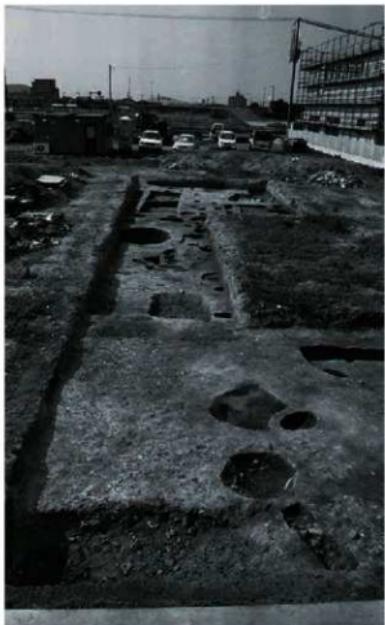
1 SH 1 出土土器



2 その他の遺構出土土器



1 調査区全景①(南西から)



2 調査区全景②(南から)



3 調査区全景③(南から)



1 調査区全景①(南西から)



2 調査区全景②(南東から)



1 SH 1 完掘状況（北から）



2 SH 1 土器出土状況（南から）



3 SH 1 土器出土状況（北東から）



4 SH 1 土器出土状況（南西から）



5 SH 1 土器出土状況（東から）



1 SH 1-SP 1 土層



2 SH 1-SP 1 完掘



3 SH 1-SP 2 土層



4 SH 1-SP 2 完掘



5 SH 1-SP 3 土層



6 SH 1-SP 3 完掘



7 SH 1-SP 4 土層



8 SH 1-SP 4 完掘



1 SH 2 完掘状況（北から）



2 SH 3 完掘状況（北から）



3 SH 4 完掘状況（北から）



4 SH 5 完掘状況（北西から）



1 SH 7・8 完掘状況（北から）



2 SH 8 中央土坑①土層（北から）



3 SH 8 中央土坑②土層（南から）



4 SH 8 中央土坑完掘状況（東から）



5 SH 5 土器出土状況（東から）



1 SX 1 検出状況
(北東から)



2 SX 1 土器検出状況
(北西から)



3 SX 1 土器撤去後状況
(北西から)



1 SX 1 土器検出状況（西から）



2 SX 1 下層石材検出状況（南東から）



3 SX 1 下層石材撤去状況（北東から）



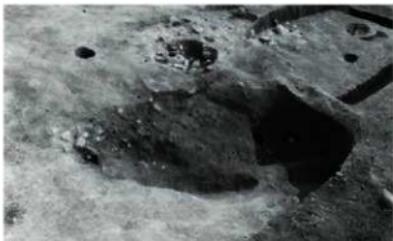
4 SX 1 挖り方検出状況（北東から）



5 SE 1 完掘状況（西から）



6 SE 1 土層（南から）



7 SK14 完掘状況（北東から）



8 SK14 土層（北東から）



36



18



14



17



13



19



15



20



16



10



21



2



4



5



6



29



26



27



118



127



119



125



120



126



121



128



129



130



122



123



124



131

報 告 書 抄 錄

2011年3月17日 印刷

2011年3月31日 発行

高松市埋蔵文化財調査報告第134集
住宅型有料老人ホームリトモ高松新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
空港跡地遺跡

発 行 者 高松市番町一丁目8番15号

高松市教育委員会

印 刷 者 高松市伏石町2157番地7
(有)中央ファイリング